

## 【DAY1 チャプター1】

☆時刻：昼 場所：バス停前

(◇バスの扉が開く音)

▲主人公がバスから降りる

(※遠くから)

C⑦ 母「お~い！ こっちだ、こっち！」

(◇上記台詞部分で自転車の鈴の音)

▲主人公がお母さんの乗る自転車に近づく  
(※普通)

B① 母「久しぶりだなー。しばらく見ない間に、大人っぽくなつたんじやないか？」  
^\*「見ない間」驚き

B① 母「ああああ（\*大袈裟に落胆）お前見ると自分も年食つたなあつて実感するよ」

B① 母「ほんと、いつの間にこんなに立派になつたんだか」

▲間

B① 母「どうだ？ 向こうでは元気にしてたかー？」

B① 母「ん？？」

B① 母「あはははは。その顔。社会人になつてやられてるーって顔だな。  
まあでも、身体は壊したりしてないんだろ？」

B① 母「それなら大変よろしい。若い奴はとにかく元気にしてるのが一番だからな」

▲間

B① 母「うちの旦那が出張なのは……伝えたよな？」

B① 母「いやー、旦那も会いたがつてたんだけどね」

B① 母「ただ今年はどうしても外せない仕事が入つたらしくて  
こっちに戻れないんだと」

B① 母「で、悪いんだけど、泊まつてる間、時間ある時でいいから  
ちび助と遊んでやつてくれるか？」

B① 母「そそ、私のかわいいかわいい自慢の娘たち」

B① 母「上の方は昔もよく遊んで貰つてたよな？」

B① 母「そ~そ~。へらへらしてお前の後ろによ~く引っ付いて」

B① 母「小さい頃だつたから、当の本人は多分もう覚えてないけどな」

▲短い間

B① 母「いやー、お前が引っ越した時は大変だつたんだぞー」  
B① 母「『お兄ちゃんが消えちゃつたー』って毎日泣いてばっかで今思うとほんと懐かれてたんだなー」

▲間

B① 母「ま、そちら辺の話はまた後でするとして」

B① 母「うちの家までの道、覚えてるか?」

B① 母「そつか。なら一人で問題ないな。  
あたしは、このまま街の方まで買い物出ちゃうから」

B① 母「それじゃチビたちの事よろしくな」

▲お母さんが自転車に乗つて移動開始  
(※遠くから)

C① お母さん「晩飯、期待して待つてろよー」

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

## 【DAY1 チャプター2】

☆時刻：昼過ぎ 場所：玄関・廊下・部屋

▲主人公が宿泊先の扉に歩いて近づく  
(◇上記▲に付随する音)

▲主人公が呼び鈴を押す  
(◇上記▲に付随する音)  
(◇ヒロインボイス扉越し  
(※距離：遠い 方向：正面) (『ビー』)

C① 紬「はーい、今行きまーす」

▲紬が扉を開ける  
(◇ガラガラという扉の開く音)

(◇ヒロインボイス扉越し解除)

B① 紬「お久しぶりです、お兄さん！」

……」の呼び方で合ってますよね？」  
疑惑

B① 紬「(\*小さく笑う)すみません。

小さい頃だったので、あまり覚えていません。母からお話は伺ってます」

B① 紬「??？」  
^\\*首を傾げる感じ

B① 紬「どんな話って……いたって普通の話ですよ？」

B① 紬「昔はうちの近所に住んでいて、よく私も遊んで貰っていたという話とか」

B① 紬「あと、今日からうちに泊まっていくんですね」

B① 紬「ささ、どうぞ中へ入ってください」

▲間

B① 紬「??？」  
^\\*首を傾げる感じ

B① 紬「どうしたんですか、急に黙つて」

B① 紬「あれ？ も……もしかして人違いでしようか？」

B① 紬「で、でしたら今の話は聞かなかつたことにというかご内密にというか」  
^\\*わたわた

B① 紬「え？ 大きくなつた……」

▲間

B① 紬「(\*溜息)もう！ びっくりさせないでくださいよ」

B① 紬「危うく、知らない人を玄関に通しちゃつたのかと思ったじゃないですか」

▲間

B① 紬「でも、お兄さんの中での私が成長出来てるみたいで良かったです」

B① 紬「(\*咳払い) え、そのその、改めまして、長女の白川紬です」

B① 紬「お兄さんがこちらにいる間、家の中の案内を任されていますので気軽になんでも聞いてくださいね」  
^\*優しく

B① 紬「はい。こちらこそ、よろしくお願いします」  
^\*優しく

▲間

B① 紬「ふと気になつたんですけど、お兄さんがこの村に来られた目的ってなんでしょう?」

B① 紬「別段、観光地つてわけでもないですし、住んでる私が言うのもあれなんですけど、なーんにもない田舎なので」

▲間

B① 紬「ふむふむ……。『夏休みに懐かしさと癒しを求めて』ですか」

B① 紬「うーん、私はまだ、大人の人が言う『懐かしい』っていうのがいまいちピンとこないですけど」

B① 紬「でもまあ、癒しという事ならこの村はうつてつけになりそうです」

B① 紬「空気は澄んでいてのんびりしてますし見ての通り自然が溢れすぎてるくらいですか」  
^\*笑いつつ

B① 紬「明日から色々なお勧めのスポットに案内しますね!」

▲間

B① 紬「大人の人の夏休みって考えると……やっぱり、滞在期間は結構短いんでしょう?」

B① 紬「二日半…ですか。正直、思つてたより短いので残念です」

▲間

B① 紬「でもでも、仲良くなるのに時間の長さは関係ないと思うんです!だから滞在中、たくさんお話できれば嬉しいです!」

▲間

B① 紬「その、実は私、お兄さんが泊まりに来るのをかなり楽しみにしていたので  
^\*もじもじ

B① 紬「だつて、ほんとのお兄さんが出来たみたいじゃないですか。(\*小さく笑い)  
だからすごくワクワクしちゃって」  
^\*もじもじ

▲少し長めの間

B① 紬「あのー…話ついでに、あともう一つだけ質問してもいいですか?」

B① 紬「ありがとうございます。」

その……実はどうしても気になる事がありまして  
^\*「実はどうしても」力を込めて^

B① 紬「……お兄さんって、今は都会に住んでるんですよね?」^\*息をのむ感じ^

### ▲長めの間

B① 紬「……くうくうー! いいなー!」^\*目が星になる感じ^

B① 紬「私、行ったこと無いんですけど、前に花火大会の中継を見たんです!」^\*はしゃぐ^

B① 紬「何から何までこの村と全然違いました!」

B① 紬「綺麗な都会の夜景をバックに、何発も何発も大きな花火が上がつてて」

B① 紬「(\*溜息) いつか行つてみたいんです。  
……あの景色を生で見れたらどんな感じなんだろうって」^\*少し独り言っぽく^

### ▲間

B① 紬「よかつたら、あとで色んなお話を聞かせてくださいね!」

### ▲短い間

B① 紬「さてと」^\*独り言^

B① 紬「玄関で長々話しちゃいましたね。(\*小さく笑う) すいません」

B① 紬「ささ、今度こそほんとにあがつてください。靴は適当に脱いじゃつて大丈夫ですから」

B① 紬「はい。滞在中はお兄さんのお家だと思つてもらえると嬉しいので。  
ぽいぽーいってそちら辺に置いといて下さい」

B① 紬「あ、もちろんちゃんと綺麗に並べて貰えれば、もっと嬉しいんですけどね」  
^\*笑いつつ^

B① 紬「えーっと。

まずは、お荷物が結構あるので、とりあえずお兄さんのお部屋に行きましょうか

B① 紬「あ、私も運ぶの手伝いますね」

B① 紬「よいしょっと」

### ▲紬が主人公の荷物を持つ

B① 紬「では、こちらです」

### ▲紬が先導して、主人公を部屋へ案内 (◇歩く音 適宜)

B① 紬「この間妹と掃除はしたので綺麗なはずなんんですけど」

紬「元がおんぼろな家なので、汚れが残っちゃつたらごめんなさい」^\*笑いつつ^

### ▲紬と主人公立ち止まる

▲紬が部屋の扉を開ける  
(◇上記▲に付隨する音)

B① 紬「じゃーん！ 到着です。」  
B① 紬「あ、適当に荷物おろしちゃってください。見てるだけですっごく重そうですから」  
B① 紬「ほら、栞！ ちゃんと挨拶して！」

△主人公が入室し、荷物をおろす  
(◇上記▲に付隨する音)

(距離・多少あり 方向・背面)  
(距離・多少あり 方向・背面)

B⑤ 紬「ここに向かいが私と妹の部屋なので  
何か困った事があつたらいつでも呼んでくださいね」

B⑤ 紬「というより……まずは挨拶しなきやですね。  
ちょっと妹呼んできますんで、お兄さんはゆっくり荷解きでもしててください」

▲紬が扉を開めて部屋を離れる  
(◇上記▲に付隨する音)

▲主人公は荷解きしたり、適当に待つ  
(◇適宜 それなりに時間使つてもらつて)

(※距離・栞と紬のボイス 部屋の外から)

C① 紬「栞～起きなさ～い！ もうお兄さん来ちゃってるよ！」

C① 紬「寝ぼけないの。  
お母さんが『今日から泊まりに来るからよろしくね』って言つてたでしょー」

C① 紬「ほ～らっ！ 挨拶しに行かないと、おやつ抜きにするよ～」

C① 栞「やだーーーー！」  
B② 栞「やだーーーー！」

C① 紬「だつたらしつかり目を覚ませてください」

▲長め間

▲紬と栞が近づいてくる  
(◇上記▲に付隨する音 適宜)

(※距離・普通 方向・正面)

C⑧ 紬「お兄さん、お待たせしました。入りますよ～？」

▲紬が扉を開ける

B② 栞「？？？ 知らないおいさんがいる」  
B② 栞「ほら、栞！ ちゃんと挨拶して！」

B② 栞「おいさんだれ～？」

B⑧ 紬「栞～！」  
B⑧ 紬「おいさんだれ～？」

B⑧ 紬「挨拶の仕方ちゃん」と教えたよね?」  
    /\*怒っている

B② 茉「きやーー! お姉ちゃん怒ったーーー」  
    /\*キヤツキヤ

B⑧ 紬「ちゃんと挨拶ができない人には、頭ぐりぐりの刑が待ってるぞ~」

A④ 茉「ぐりぐり痛いからやだ! わかった! 茉挨拶ちゃんとする!」

▲上記台詞部分 茉は主人公の背中側にいる

B⑧ 紬「よろしい。じゃあもっかいこつちきて」

▲茉が紬の横へ移動

B② 茉「えっと……白川茉です! おいさん、よろしくますっ」

B⑧ 紬「おいさんじゃなくて、お・に・い・さ・ん…だよね?  
あと『よろしくお願ひします』」

B② 茉「お、おい、おい……?」

B⑧ 紬「お兄さん」

B② 茉「お、お兄さん? 白川茉ですっ! よろしくおねがいしますっ」

B⑧ 紬「ごめんなさい。普段はちゃんと挨拶できるんですけど、ちょっと寝ぼけてるみたいで」

B② 茉「お姉ちゃん、このおいさん誰?」

B⑧ 紬「うーん…まだ寝ぼけてるな~。(\*小さく溜息)  
よーし茉、居間でお菓子食べに行こつか?」

B② 茉「お菓子? 茉、お菓子食べるーー!」

B⑧ 紬「ごめんなさいお兄さん。すぐ戻ってきますので、ちょっと行つてきますね」

B⑧ 紬「ほら茉、行くよ。ちゃんとお兄さんにさよならして」

B② 茉「うつ(\*頷き)。おいさん、ばいばい」

▲茉と紬が部屋から出る  
(◇引き戸を閉める音 適宜調整)

▲茉と紬が部屋から廊下へ移動  
(◇上記▲に付随する音 適宜調整)

▲廊下で紬と茉が立ち話  
(※廊下から)

C① 茉「おいさん、あとで遊んでくれるかな?」

C① 茉「どうだろうね。茉がちゃんといい子にしてたら遊んでくれるんじゃないかな」

C① 紬「あとさー『お兄さん』だよ? その『おいさん』って呼び方、変だからね」

C① 蕉「おいさんは、おいさんだよ? 蕉、おいさんがいい!」

C① 紬「うん……まあでも、とりあえずはいいのかな。  
とくに失礼っぽくはない呼び方だし」

C① 紬「あ、そうだ蕉。

蕉「お姉ちゃん、多分あとでお買い物行かなきゃだから、その時はいい子にしてるんだよ」

C① 蕉「蕉もお買い物いく」

C① 紬「ダメ。蕉がいないとお兄さんが一人で困っちゃうから」

C① 蕉「やだ! 蕉も行く」

C① 紬「あー、じゃあ残念だけど、お菓子は無しになっちゃうかなあ」

C① 紬「お兄さんが分からぬ事があつた時に

蕉が助けてあげると思っての『褒美だしな』」

C① 蕉「やだ。お菓子たべたい」

C① 紬「ダメです。ちゃんとお姉ちゃんの『言うこと聞かない人にはあげませーん』  
^\*わざとらしく^\*」

C① 蕉「やだやだやだ! お姉ちゃん、けちんぼだよ」

C① 紬「あれー? 今なんか『けちんぼ』とか聴こえた気がするけど  
きっとお姉ちゃんの氣のせいだよね?」

▲ 間

C① 蕉「お……お……お」

C① 紬「? ? ? どしたの?」^\*「? ? ?」は首を傾げる感じ^\*

▲ 間

C① 蕉「お姉ちゃんの、けちんぼおばさーん」

▲トテトテ走つて逃げる蕉  
▲遠くに向けて二人が移動  
(※距離:遠のいていく 方向:適宜)

C① 紬「あー! そんな事言っちゃダメでしょー」

C③ 蕉「(\*笑いながら) けちんぼおばさんだー」

▲ゆっくり追う紬

C② 紬「うーん、どういくのー。お姉ちゃんにそんな事言っちゃダメなんだからね!」

【チャプターEND】

▲二人とも廊下の奥へ  
(◇適宜 フェードアウト)

## 【DAY1 チャプター3】

☆時刻：昼過ぎ 場所：部屋

▲長めの間（夏の音を聞く時間）

▲紬が扉をノック  
(※距離：扉越し)

C(8) 紬「お兄さん、ちょっとといいでですかー？」

C(8) 紬「ありがとうございます。入りますね」

▲扉を開けて紬が部屋の中へ  
(※距離：普通 方向：正面)

B(1) 紬「じゃじゃーん。  
近所のおばあちゃんからお団子を貰ったので、よかつたらー一緒にいかがですか？」

B(1) 紬「(\*クスッと笑う) よかつた。小腹が空いてるなら一度いいですね」

▲上記台詞を言いつつ紬が主人公の隣へ移動

A(7) 紬「では、お隣にお邪魔しまーす」

(※距離：近い)

A(7) 紬「とりあえず机の上にお団子広げちゃいますので、適当につまんでください」

A(7) 紬「ではでは、優しいおばあちゃんに感謝して」

▲紬が手を合わせる

A(7) 紬「いただきまーす」

▲紬と主人公がお団子を食べる

A(7) 紬「(\*団子を食べるアドリブ)」

A(7) 紬「んーっ、おいしい~」

A(7) 紬「あ、お茶もついでおきますね」

▲ヒロインがグラスを二つだしてお茶を注ぐ

A(7) 紬「あの、さつきはバタバタしちゃってごめんなさい」

A(7) 紬「乗つたら、またお昼寝しちゃってます」へ\*優しく

A(7) 紬「なーんていうか、普段は元気すぎるくらいの妹でして  
……根は優しくいい子なんですねけどね~」

▲間

A(7) 紬「えっ？ 子供は元気があるほうが多い？ ……ですか？」

A(7) 紬「うくん……確かに子供は元氣があるのが一番なんですけど姉としてはもうちょっと落ち着いてほしいというか」

▲間

A(7) 紬「(\*クスッと笑う) まあ、なにはともあれ。お兄さんが優しい方でよかったです」

A(7) 紬「変な呼び方して、さつそく呆れられてるんじゃないからてひやひやでした」

A(7) 紬「うちにいる間、あの子この部屋に押しかけて来ちゃうと思いますけど」

A(7) 紬「その一、邪魔にならない程度でいいので、一緒に遊んで頂けると助かります」

A(7) 紬「やれ虫取りー、やれ川遊びーって具合に、私一人だと全然手におえないんです」  
^\*笑いつつ^

▲間

A(7) 紬「そういえば、まだ母が帰つてなくて……えつ? もうバス停で会つてたんですか!?!?」

A(7) 紬「(\*ため息) そうだつたんですね。迎えに行くなら行くで、一言教えてくれたつていいのに」(ちょいふて気味)

A(7) 紬「その、母は何か言つてましたか?」

A(7) 紬「あー、やっぱり街の方まで買い物に出ちゃつたんですね」

A(7) 紬「(\*小さく笑う) お兄さんが来るという事でいつもより晩御飯の準備に気合が入つてましたから」^\*笑いつつ^

A(7) 紬「んー、でもそれなら、結構時間かかりそうだし……そうだ、お兄さん! この部屋で夏休みの宿題をやらせて貰つてもいいですか?」

A(7) 紬「はい。ここで、この机で。一人で部屋にいるのも退屈ですし、それに、ここだとお兄さんに質問もできちゃいますから(\*「それに」) いたずらっぽく」

A(7) 紬「ダメ、ですかね? お兄さんのお邪魔にはならないつもりなんですね」

▲間

A(7) 紬「ありがとうございます」

A(7) 紬「では、部屋から宿題持つてきますね」

▲紬が立ち上がる

A(7) 紬「ふふつ、これでわからない所があつても安心です^」^\*笑いつつ^

▲紬が部屋を出て宿題を取りに行く  
(◇適宜 アウト)

## 【DAY1 チャプター4】

☆時刻：昼過ぎ 場所：部屋  
(◇※)のパートは 夏の音、宿題をする鉛筆の音などがメインとなります

(◇環境音など適宜)

▲紬が戻ってきて、宿題を始める所からスタート

▲紬が宿題を机の上に広げる

B① 紬「さーと。ではお言葉に甘えて、宿題、はじめちゃいますね」

B① 紬「まずは……」の問題集からと

▲上記の詞を書いていつつ問題集を開く

♪S

▲紬が宿題を開始

▲紬がしばらく宿題を続ける

▲紬が手を止めると

(◇動作音 筆記用具の音やページをめくる音など 一回停止)

♪E

B① 紬「お兄さん？」

B① 紬「ぼーっとからを見てますけど、どうかしましたか？」

▲短い間

B① 紬「夏休みの宿題が懐かしい、ですか？」

B① 紬「(\*小さくため息) 大人になると、そういう感覚になるものなんですかねー」

B① 紬「今はこんなにめんどくさいのに。なんだか不思議です」

B① 紬「(\*小さく笑う) 私もいつか、笑顔で眺めるようになる事を祈っています」

▲短い間

B① 紬「(\*小さく一呼吸) さーと、もうひと踏ん張りしようと」

B① 紬「あ、お兄さんまで座つてなくとも大丈夫ですよ。のんびり横にでもなつていてください」

B① 紬「はい、どうぞどうぞ。私はあと少しなんで、ここからラストスパートです」

▲紬が宿題再開 【以降ASMR(勉強してる所作音と環境音)】

(チャプターEND)

☆時刻：昼過ぎ 場所：部屋

▲紬が宿題をしている 主人公は寝落ちしてた状態でスタート

(◇環境音など適宣)

(◇紬が宿題をしている動作音)

C① 紬「よーし、これでっと。問題集おしまーい」  
    ヘ\* 独り言>

▲上記台詞「これでっと」部分で紬が手を止める

(◇動作音 筆記用具の音やページをめくる音など 停止)

C① 紬「ふうー。結構進んだかなあ」  
    ヘ\* 満足そうに\

C① 紬「集中してると、あんまり気にならなかつたんですけど、暑くないですか？」  
    お兄さん

▲間

C① 紬「??？」

C① 紬「あれ？」  
    ヘ\* 疑問独り言っぽく\

C① 紬「あのー、お兄さーん。聞こえてませんかー」  
    ヘ\* 軽く呼びかけ\

▲紬が移動して、主人公の顔を覗き込む

B⑧ 紬「あ」

B⑧ 紬「(\*小さく笑い) お兄さん、寝ちゃつてる」

▲長めの間

B⑧ 紬「(\*寝顔、かっこいいかも」  
    ヘ\* 優しく独り言>

▲間

B⑧ 紬「…………! (\*ハツとする感じ)」

B⑧ 紬「いけないいけない、見とれちゃつてたよ」

▲間

B⑧ 紬「いいよなあ、年上のお兄ちゃんって」  
    ヘ\* 独り言っぽく\

B⑧ 紬「家では私がお姉ちゃんだから、その反動なんだろうけど」  
    ヘ\* 独り言っぽく\

▲間

B⑧ 紬「(ため息) 一度でいいから、私も兄弟に甘えてみたいな」  
    ヘ\* 独り言っぽく不満\

▲間

B⑧ 紬「あ、……そうだ」 $\wedge*$ 思いついた感じ\

B⑧ 紬「いい事思いついちゃった。  
せっかくのチャンスなんだからお兄さんに甘えちゃおつと」 $\wedge*$ 独り言っぽく\

B⑧ 紬「と、その前に。栢がまだ起きてないか確認とかなきや」 $\wedge*$ 独り言っぽく\

B⑧ 紬「お母さんに知られたら、子ども扱いされそうだし」

▲ 紬が部屋を出て栢の様子を見に行く

▲ 紬が戻ってくる

B⑧ 紬「安全確認よーし」 $\wedge*$ 独り言っぽく\

▲ 間

B⑧ 紬「ほんとは、お兄さんに一言断つてからにするべきなんだろうけど」 $\wedge*$ 独り言っぽく\

B⑧ 紬「でも、起きてたら恥ずかしくてこんな事頼めないもん」 $\wedge*$ 独り言っぽく\

B⑧ 紬「だから……しようがないよね」 $\wedge*$ 自分に言い聞かせる感じ\

▲ 間

B⑧ 紬「うん。でもやっぱり…一応確認はとつておこう」

▲ 短い間

B⑧ 紬「お兄さーん？ お隣、お邪魔しますねー？」 $\wedge*$ 小声\

B⑧ 紬「確認しましたよー？ いいんですよねー？」 $\wedge*$ 小声\

▲ 間

B⑧ 紬「よし。お兄さんも無言で肯定してくれてる事だし」

A⑦ 紬「えいっ」

▲ 上記台詞部分で紬が主人公の隣に寝る

(※距離：近く)

A⑦ 紬「くううー！」 $\wedge*$ 小声で喜ぶ感じ\

A⑦ 紬「お兄ちゃんと並んでお昼寝とか夢みたい」 $\wedge*$ 嬉しそう\

▲ 間

A⑦ 紬「身体、もっと近づけてみても大丈夫かな？」 $\wedge*$ 独り言っぽく\

▲ 間

A⑦ 紬「お兄さんが起きませんように」  
～  
A⑦ 紬「お兄さんが起きませんように」  
～  
A⑦ 紬「お兄さんが起きませんように」  
～

(※距離：耳元)

A⑦ 紬「わー、もう息がかかりそう」  
～  
A⑦ 紬「落ち着けく私く、深呼吸、深呼吸」  
～

A⑦ 紬「(\*深呼吸)」  
～

A⑦ 紬「(\*深呼吸)」  
～

▲間

A⑦ 紬「よーし、落ち着いた」  
～

▲間

A⑦ 紬「それにしてもお兄さん、気持ちよさそうな顔して寝てるなあ」  
～

▲間

A⑦ 紬「これだけ喋ってても起きないし、結構眠り深いのかも」  
～

▲間

A⑦ 紬「お兄さんーん、気持ちいいですかー？」  
～

▲間

A⑦ 紬「あ、今ちょっと笑った気がする」  
～

▲間

A⑦ 紬「(\*小さく笑う) 夢でもみてるのかな？」  
～

▲間

A⑦ 紬「さて、お兄さんの寝顔も見てて飽きないけど」  
～

▲間

A⑦ 紬「せっかくのチャンスなんだから、私もお昼寝しちゃおっと」  
～

▲間

A⑦ 紬「おやすみなさい、お兄さん」  
～

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

## 【DAY1 チヤプター6】

☆時刻：昼 場所：部屋

▲主人公と紬が並んで寝ている状態からスタート

(◇適宜 夏の環境音)

♪S

A⑦ 紬「(\*近くで聞こえる寝息)」

A⑦ 紬「ん」

♪E

(◇遠くから黒電話のなる音)

A⑦ 紬「あ、電話鳴ってる」ヘ\*小さく独り<sup>音</sup>▽

A⑦ 紬「(\*ため息) そろそろタ無断お昼寝タイムも終了かな」ヘ\*小さく独り<sup>音</sup>▽

A⑦ 紬「よ、しようと」ヘ\*小さく独り<sup>音</sup>▽

▲上記台詞部分で紬が起き上がる

B⑧ 紬「(\*小さく笑い) ドキドキしちゃって……あんまり疲れなかつたなー」  
ヘ\*小さく独り<sup>音</sup>▽

B⑧ 紬「でも、一緒にお昼寝出来て嬉しかつた~」ヘ\*小声独り<sup>音</sup>▽

B⑧ 紬「(\*小さく笑い) ありがとうございます、お兄さん」ヘ\*小声優しく▽

▲短い間

B⑧ 紬「さーってと、早く電話出なきや。お母さんからかなー」

▲上記台詞をいつつ紬が部屋の外へ

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

## 【DAY1 チャプター7】

☆時刻：夕方前 場所：部屋

▲主人公は部屋で昼寝中  
※主人公が気付かないうちに、既に紬は部屋の外へ出ています

(◇適宜 夏の環境音)

▲長めの間（夏の音を聞く時間）

▲部屋の外に栞が来る

(※距離：扉越し)

C① 栞「おこや〜ん」

C① 栞「おこや〜ん いる〜？」

C① 栞「栞お部屋に入つていいかな〜？」

(※距離：扉越し解除 普通)

C① 栞「あいがと〜」

▲栞が入室

B① 栞「栞お昼寝してて、起きたらお姉ちゃんいなかつたの。  
おいらさん、お姉ちゃんどこ行つたか知つてる？」

B① 栞「おいらさんもわからなかあ。じゃあ栞、お姉ちゃんに遊んでもらえな〜」

▲（※距離：上記2つの台詞を言いつつ主人公の近くにノロノロと移動）  
※B①からA③に移動するようにお願いします。

▲間

(※距離：近い)

A③ 栞「ねーねー、おいらさん何してたの？」

A③ 栞「お昼寝？ んふー（\*へらつと笑う）栞と一緒だ〜」

A③ 栞「?/?/?」^\*何かを見つけたような

A③ 栞「なんか机の上に紙があるよ。なあにこれ、お手紙？」

▲栞が机のそばに移動 紙を手に取る

A③ 栞「えっと……、ちょっと外に出てきます。お昼寝〜」一緒に出来て楽しかったです。紬?」

^\*紙に書いてある文章をたどたどしく読むという感じ

▲間

A③ 栞「?/?/?」^\*考え中^

▲間

A③ 茉「あ————。じゃあお姉ちゃんも一緒にお昼寝してたんだ！」

A③ 茉「おいさんとお姉ちゃんだけでずるいんだよ。  
茉だけ仲間外れするの、いけないんだよ！」

▲間

A③ 茉「うへ (\*ふてくれる) あやまつても、ゆるしてあげないもん」  
^\*不機嫌▽

A③ 茉「あとで『おいさんとお姉ちゃんだけ一緒に寝てた』ってお母さんにいう  
^\*ふてくれるながら▽

(◇適宜 上記▲部分  
^\*ガタツツみみたいな音で主人公の動搖を)

▲少し間

A③ 茉「? ? ?」

A③ 茉「どしたの、おいさん？」

A③ 茉「おいさん、茉と一緒に遊んでくれるの？」

A③ 茉「やつたー！」

A③ 茉「(\*小首をかしげる感じ) ??? でもそのかわり、おいさんと約束？」

A③ 茉「いいよー。うん：お姉ちゃんとお昼寝の事？ お母さんに内緒？」  
^\*主人公の発言を繰り返している感じ▽

A③ 茉「うーん (\*思案) ……わかった  
^\*カイ、される？ つていうの、よくわかんないけど  
^\*思案の後、明るく。わかつてるけどわかつてない感じ▽

A③ 茉「茉、お母さんに言わないつて約束する！」

A③ 茉「うん。約束！」

A③ 茉「じゃあお部屋から、おもちゃ取ってく。おいさん、ちょっと待ってて」

▲茉が一旦自室へ駆け足で移動

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

## 【DAY1 チャプター8】

☆時刻：夕方前 場所：部屋から神社

▲主人公は部屋で座つてゐる

(◇適宜 夏の環境音)

▲少し長めの間（夏の音を聞く時間）

▲葉が駆け足で戻つてくる

B① 葉「おもちやもつてきた～」

B① 葉「え～とね～、これだよ～。けん玉つていうの～」

B① 葉「？？？」 へ小首をかしげる感じ♪

B① 葉「どしたの、おいさん」

B① 葉「イマドキ、口フウ…………？ う～……おいさんの囁つてゐること、葉よくわかんない」

B① 葉「とりあえず、一緒にけん玉やろ～」

▲短い間

B① 葉「じゃあまずは、葉がお手本をみせます。ぱちぱち～」

B① 葉「う～、おいさんちゃんとして。ぱちぱちー！」

▲主人公拍手をする

B① 葉「えへへ～」へ\*にへらつと笑う

▲短い間

B① 葉「えっと、ではいきます」

♪S

▲葉がけん玉で遊ぶ それなりにミスをしつつ

※葉けん玉アドリブ（現場相談）

※主人公の周りを走り回る動作とかも欲しいです

(◇上記▲に付随する音 適宜)

▲主人公がけん玉を渡され挑戦 ※結構うまくいく  
(◇上記▲に付随する音 適宜)

B① 葉「どう？ 葉、上手？」 へ\*きょとん♪

B① 葉「おいさんもやる？ 葉より上手だつたらほめてあげる」

B① 葉「お～！ おいさんす～い。葉そんなのできない」

B① 茉「うー、けん玉はおいさんの勝ちかもしれない」

B① 茉「だから、けん玉やめて違う事しよ?」

B① 茉「うーんと、うーんとー……あ! パイロット<sup>dg</sup>」<sup>dg</sup>したい!」

B① 茉「えっとね、おいさんがロボットで、茉がパイロット」

▲短い間

A① 茉「おいさん、しゃがんでー」

▲主人公がしゃがむ 茉は背後に回る

(◇適宜 動作音)

A⑤ 茉「んしょ、んしょっと」

▲上記台詞を言いつつ、茉が主人公の背中から首の付け根を跨ぎ、肩車の形に

(◇適宜 動作音)

A⑤ 茉「できたー! おいさん」のまま肩車ー!」

A⑤ 茉「えへへへ。茉がパイロットになるの」<sup>^\*</sup>上機嫌<sup>v</sup>

A⑤ 茉「よーし、ガチヤンガチヤン、ウイーン……おいさん口ボ、発進!」

▲茉が主人公の頭をポンポンと叩き、主人公立ち上がる

A⑤ 茉「おおおおおお! たかーい!

おいさん口ボ、このまま玄関に向かって発進!」<sup>^\*</sup>めっちゃはしゃぐ<sup>v</sup>

▲適宜 茉が頭を叩いたりする動作は任せます

▲部屋から廊下に出る

A⑤ 茉「ねーねー、おいさん、もっとガッシャンガッシャンして」

A⑤ 茉「歩く時は、がっしゃーん! ガっしゃーん! だよ?」

▲主人公、歩き方をロボットっぽく変更

(◇適宜 足音調整)

A⑤ 茉「おー。おいさん口ボ、どすどすしてて、かっこいい」<sup>^\*</sup>目を輝かせる感じ<sup>v</sup>

▲玄関まで歩いていく

A⑤ 茉「茉、このまま神社いきたい! お外に発進!」

A⑤ 茉「? おいさん口ボ、お靴履かなきやダメなの?」<sup>^\*</sup>きょとん<sup>v</sup>

A⑤ 茉「わかったー。じゃあ一回降りるから、おいさん口ボしゃがんで」

▲主人公が一度茉を降ろす

A⑤ 茉「あいがとー」

▲主人公が靴を出して履く

A⑤ 茉「あー、そだー。お姉ちゃん心配するから、お手紙かいてくる」

▲茉が部屋に走つてく 主人公座つて待つ  
(◇適宜動作音 あとセミの声とか聞こえてると嬉しいです)

▲トテトテと走つてから止まって振り返る

A⑤ 茉「おーさん、そこで待つててねー」ヘ\*呼びかける感じ▽

▲再びトテトテと走り出す

C① 茉「お手紙おいてきたー」ヘ\*呼びかける感じ▽

▲茉が上記台詞を言いつつ戻つてくる

B① 茉「ちゃんと『おーさんと遊んでくる』って書いてきたよ」

B① 茉「茉、えらい?」

B① 茉「むふふー」ヘ\*嬉しそう▽

▲間

B① 茉「おーさん、もうお靴履けた?」

B① 茉「じゃあしゃがんでー」

A⑤ 茉「んしょ、んしょ」

▲上記台詞を言いつつ茉が主人公に肩車される

A⑤ 茉「よーし、おーさん口ボ発進ー」

A⑤ 茉「地球の平和をまもるんだー」

▲主人公が扉を開けて外へと進む

A⑤ 茉「神社いくの、まずあつちー」

A⑤ 茉「ふふーん」※適当に上機嫌な茉のアドリブ（現場相談）

▲少しして立ち止まる

A⑤ 茉「えっとね、ここ曲がってから、まつすぐ」

▲また進む

▲立ち止まる

A⑤ 茉「あ、いー、こつちー」

A⑤ 茉「ここの上、神社ー。ここからの階段、茉もおいさんと歩くー」

A⑤ 茉「うん。おいさん口ボ、しゃがんで」

▲主人公がしゃがむ

A⑤ 茉「ん、しょ」

▲上記台詞を言いつつ茉が肩車から降りる

A⑤ 茉「おいさん、ここまであいがとー」

B① 茉「じゃあここ、登って、神社いこー」

▲二人で階段を上る

B① 茉「神社ー、神社ー、じんじんじゃー」 ヘ\*よくわかんない鼻歌▽

B① 茉「神社ー、神社ー、じんじんじゃー」 ヘ\*繰り返し▽

▲主人公と茉、神社に到着

A③ 茉「ついたー」

A③ 茉「ここ、通るときお辞儀するって、パパが言つてた」

A③ 茉「えっとー、失礼します！ 茉です」

▲鳥居の前で立ち止まり、上記台詞を言いつつ一礼 主人公も一礼

▲境内の奥へと進む

A③ 茉「神様あっちにいるのー」

▲二人とも立ち止まる 目の前に参拝場所

A③ 茉「おいさん、お金もつてる？」

▲主人公が小銭入れの中身を確認する

A③ 茉「茉にも、ひとつちょうだい。ここいれるー」

▲主人公が茉に小銭を一枚渡す

A③ 茉「あいがとー」

A③ 茉「よーし投げるぞー。んー、えいっ」

▲茉がお賽銭を賽銭箱に投げる  
(◇上記に付随する音)

A③ 茉「はいったー。おいさんもお金いれて？」

▲主人公もお賽銭を投げる

A ③ 栗「んふ（\*嬉しそう）。じゃあ、鈴しゃんしゃんして、神様にお願いしよ？」

A ③ 栗「いくよー？」

▲栗が神社の鈴をならす

▲一人で 二拝・二拍手・お祈り・一礼

A ③ 栗「ん————」（祈るアドリブ）

A ③ 栗「栗、ちゃんとお願いできたよ。 おいさんもちゃんとできたー？」

A ③ 栗「んふー、よかつた」^\*満足そうに^<

▲間

A ③ 栗「じゃあ、夕方だからお家帰ろー。 おいさん、栗帰りはおんぶがいい」

（◇適宜 アウト）

【チャプターEND】

## 【DAY1 チャプター9】

☆時刻：夕方～夜前 場所：神社から玄関

▲主人公が栞をおぶつている状態でスタート

(◇適宜 環境音 夏の夕方)

A(5) 栞「んふふー (\*満足そうに)。おんぶも楽しい」

A(5) 栞「よー」 おいさん口ボ、お家に帰るの出発

▲主人公が歩き出す

A(5) 栞「(\*あぐび)」

A(5) 栞「ねー、おいさん？」

▲上記台詞「おいさん」部分言い終わりで、主人公が立ち止まる

A(5) 栞「お家まで帰る道わかる？」

A(5) 栞「栞、ちょっと眠くなっちゃったから、お家着くまでねんねしてもいい?」

▲主人公が再び歩き始める

A(5) 栞「んふふー (\*満足そうに) あいがとー」

♪S

▲主人公が家に向けて歩く  
(◇ここから栞をおんぶしつつ、夕方の田舎を散歩するような形に)

A(5) 栞「(\*寝言アドリブ)」へ\*「もう食べられない」など(現場相談) ✓

A(5) 栞「(\*寝息)」

♪E

▲主人公が家に着いて、玄関のベルを鳴らす

(※紬の声ドア越し)

C(1) 紬「はーい、開いてますよー」

A(5) 栞「ん」

▲栞が目を覚ます

A(5) 栞「お家着いた?」

▲紬が扉を開ける

B(1) 紬「あ、お帰りなさい。一人ともどこ行ってたんですか?」

A(3) 栞「えへへー、内緒~」

B ① 紬「あーそうですか。どうせ散歩とかでしょー? ここら辺に遊ぶところなんてないんだから」へ\*子供をあやす感じ

B ① 紬「ご飯、もう出来てるからね。ちゃんと手洗ってから居間に来る」と

A ③ 茉「わかったー」

B ① 紬「お兄さんも、しっかり手を洗ってくださいねー」

▲ 紬が廊下の奥へ歩き出す

▲ 間

A ③ 茉「ねー、おいさん。今日は遊んでくれて、あいがと」

A ③ 茉「おいさん、茉と一緒に楽しかった?」

A ③ 茉「んふふー (\*満足そう)。茉も、楽しかったー」

A ③ 茉「じゃあ一緒に手で洗って、ご飯食べに行こー」

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY1 チャプター10】

☆時刻：夜 場所：居間

▲一同 手を合わせる  
(◇適宜 動作音)

一同 「『ど』馳走様でしたー！」（母B①、紬A⑦、B⑧）

B① 母 「かあー、食った食った」

B⑧ 茉 「茉もう何も食べられないー」

A⑦ 紬 「すごい量だったね」

B① 母 「いやー、若い男がいるんだから、これくらいでも足りるか不安だったんだが」

A⑦ 紬 「ちょっと作りすぎだったかもね」

B⑧ 茉 「おいらんもお腹いっぱいになつた？」

B⑧ 茉 「えへへー。茉も食べ過ぎて動けないー」

B① 母 「さーって、あとは各自風呂入つて早めに寝る」とー

A⑦ 紬 「茉 「はーい」

A⑦ 紬 「それじゃあ、食器片付けちゃうね」

B① 母 「さんきゅー。

あ、あとスイカ切つてあるから、風呂上りに食いたい奴は食えよー」

B⑧ 茉 「茉スイカ食べるー！」

A⑦ 紬 「あんた、さつき『もう何も食べられないー』とか言つてたじゅん」

B⑧ 茉 「スイカは別だもん！」

A⑦ 紬 「はいはい。ちゃんと食べたら歯磨きするんだよー？」

▲上記台詞を語りつつ紬がまとめた食器を台所へ運びに行く

B⑧ 茉 「ちゃんとするもん！」

B① 母 「さーって、そろそろ風呂でも入るかあー。どつこいしょ」

▲上記台詞 「どつこいしょ」 部分でお母さんが起き上がる

B⑧ 茉 「茉もお風呂行くー」

B① 母 「お、じゃあ茉、一緒に背中流しつこするか」

B⑧ 茉 「うん！」

【チャプターEND】

▲上記台詞部分で茉とお母さんが出ていく

## 【DAY1 チャプター11】

☆時刻：夜 場所：部屋

▲主人公が部屋にて食休みをしている状態でスタート  
(※紬ボイス 部屋の外から)

C① 紬「お兄さーん、今お部屋入つても大丈夫ですかー?」

C① 紬「ありがとうございます、失礼しますね」

▲紬が部屋に入る

B① 紬「お兄さんは、食後の休憩ですか?」

B① 紬「(\*小さく笑う) 一緒ですね。私もお腹いっぱいなので、ちょっと休憩しようかと」

▲間

B① 紬「今日は晩御飯、作りすぎちゃいました」

B① 紬「(\*小さく笑う) まだスイカも残つてるんですよ。正直食べれるか不安です」

B① 紬「あ、お兄さんスイカ食べられますか? もう食べるのであれば持つてきますけど」

B① 紬「お風呂上りに食べる……ですか。(\*小さく笑う)

確かに、まだお腹膨れでますよね」 ^\*笑いつつ^

▲間

B① 紬「お母さんと栞のお風呂長くなりそうなんですけど」

B① 紬「よかつたら待つてる間、一緒に縁側で涼みませんか?」

B① 紬「夜風が気持ちいいですし休憩にはぴったりだと思いますよ」

▲短い間

B① 紬「ありがとうございます」

B① 紬「あ、あともう一つ」

B① 紬「そのー、お兄さんに何か今日のお礼が出来れば嬉しいんですけど」

B① 紬「今日は私も栞も、いっぱい遊んで貰いましたから」

B① 紬「肩もみとか、休憩がてら私に出来る事であれば遠慮なく言つてください」

▲長い間

B① 紬「????」

B① 紬「お兄さん? どうしたんですか、考え込んでいるように見えますけど」

B① 紬「あつ! もしかして、何かご希望見つかりましたか?」

【チャプターEND】

【DAY1 ナヤプター-12】

☆時刻：夜 場所：縁側

(◇夏の夜の音)

▲主人公と紬が縁側に到着した状況からスタート

B① 紬「ふー（＊伸び）、やっぱり縁側に出ると夜風が気持ちいですね」

B① 紬「（＊小さく笑う）まさかお兄さんが耳かきを希望されるとは思ってませんでした」

B① 紬「でも、私が出来ないような事じゃなくて良かつたです」

B① 紬「葉の耳をいつも掃除してあげてるので、耳かきには結構自信あるんですよ？」

B① 紬「では早速、準備しちゃいますね」

▲間

B① 紬「えーっと。私は、トトに座って、耳かきを持ってひとつ」へ\*独り囁つぽく

▲上記台詞を言いつつ紬が縁側に座る

B① 紬「ふーー」お兄さん、まずは膝枕の形になりましょうか」

B① 紬「たつ、確かに、ちょっと恥ずかしいんですけど、多分これが一番やり易いので」

B① 紬「それに今は、耳掃除がんばるぞって気持ちの方が強いんです」

B① 紬「だから、遠慮せず頭を乗せちゃってください」

▲主人公が頭をのせて膝枕の形に

A① 紬「肩や首、痛くないですか？」

A① 紬「（＊小さく笑う）では、お好きな方の耳を上に向けてください」

▲主人公右耳を上に

A⑦ 紬「おー。まずは右耳からですね」

▲短い間

A⑦ 紬「見えにくいので今から顔を近づけますけど  
息がくすぐったかつたりしたら言つてください」

▲短い間

A⑦ 紬「（＊小さく笑う）ではでは～失礼しまーす」

▲紬が右耳の耳かきを開始

(◇右耳耳かき音 開始 指定まで継続)  
(※距離：以下耳かき中は大体耳元になります)

A⑦ 紬「痛くないですか～？」

A⑦ 紬「まずは手前のほうから掃除していきますね~」

A⑦ 紬「あ~、ここ」へ\*独り言囁き

A⑦ 紬「よーしつ、とれたとれた」へ\*独り言囁き

A⑦ 紬「次はー、あー、ここら辺かな」へ\*独り言囁き

A⑦ 紬「みーつけた」へ\*独り言囁き

A⑦ 紬「ここの淵は」へ\*独り言囁き

A⑦ 紬「よし、大丈夫かな」へ\*独り言囁き

A⑦ 紬「次は奥の方に」とへ\*独り言囁き

A⑦ 紬「おー、これは中々。やりがいがありそうです」

A⑦ 紬「あ~、いえ。そんなに汚れてるってわけじゃないんですよ?」

A⑦ 紬「ただ、自分で掃除してたけどどうでもうまく届かない部分ってあると思うんです」

A⑦ 紬「(\*小さく笑う)だからあまり気にしないでください」

A⑦ 紬「それに今日、私がしつかり綺麗にしちゃいますから」

A⑦ 紬「(\*小さく笑う)はい。このまま大船に乗つたつもりでいてください」

A⑦ 紬「んーー。とれそなんんだけど」

A⑦ 紬「よし」

▲ 紬が一旦手を止める  
(◇右耳耳かき音 綿棒 開始 指定まで継続)

A⑦ 紬「次に綿棒で表面の小さな汚れを取つていきます」

(◇右耳耳かき音 綿棒 開始 一旦停止)

A⑦ 紬「やつぱり綿棒だと細かい汚れも取れますねー」

A⑦ 紬「少し擦りますね~」

A⑦ 紬「よし、充分かな」へ\*独り言囁き

▲ 紬が一旦手を止める  
(◇右耳耳かき音 一旦停止)

A⑦ 紬「では、軽く耳かきの頭で拭き取りますね」

(◇右耳耳かき音 毛羽立つての側 開始 指定まで継続)

A⑦ 紬「気持ちいですか~?」

A ⑦ 細「少しくるくる回しますよー」

A ⑦ 細「うんつ。こんな感じで大丈夫かな」 $\wedge$ \*独り言囁き\

▲細が一旦手を止める  
(◇右耳耳かき音 一旦停止)

A ⑦ 細「最後に軽く息を吹きかけますね」

A ⑦ 細「ふー、ふー、ふー（何回か軽く息吹きかけ）」

▲細が主人公の耳に息を吹きかける

A ⑦ 細「これで細かい汚れは飛ばしちゃいました」

A ⑦ 細「お兄さん、次は左耳を上にしてください」

▲主人公が左耳を上に向ける

A ③ 細「ありがとうございます。では左耳も始めますね」

(◇左耳耳かき音 開始 指定まで継続)

A ③ 細「さーって、どんな感じかなー」

A ③ 細「あつ、いゝ」 $\wedge$ \*独り言囁き\

A ③ 細「ふう」 $\wedge$ \*独り言囁き\

A ③ 細「もう少しかな」 $\wedge$ \*独り言囁き\

A ③ 細「よしよし」 $\wedge$ \*独り言囁き\

(◇左耳耳かき音 一旦停止)

A ③ 細「では、また綿棒に持ち替えます」

(◇左耳耳かき音 綿棒 開始 指定まで継続)

A ③ 細「縁のほうもしつかりと」 $\wedge$ \*独り言囁き\

A ③ 細「よーし、綺麗になつたかな」 $\wedge$ \*独り言囁き\

(◇左耳耳かき音 一旦停止)

A ③ 細「こちら側も、軽く耳かきの頭で拭き取りますね」

(◇左耳耳かき音 綿棒 開始 指定まで継続)

A ③ 細「こんなとこかな」

(◇左耳耳かき音 一旦停止)

A ③ 細「最後にまた軽く息を吹きかけますよー」

A③ 紬「ふー、ふー、ふー」

♪E

A③ 紬「よし。お疲れ様です、お兄さん」

A③ 紬「これで一通り耳掃除は終了です」

A③ 紬「もう起き上がつて頂いて構いませんよ」

▲主人公が起き上がる

B① 紬「どうでしよう？ すっきりしましたか？」

B① 紬「(\*小さく笑う) それならよかったです」

B① 紬「私も新鮮な感じがして楽しかったですよ」

▲短い間

B① 紬「さーつて、そろそろお風呂も空いたかな？」

▲短い間

B① 紬「よければお兄さん、先に入っちゃつてください」

B① 紬「私はもう少しここで休んでいきますから」

B① 紬「はい、どうぞどうぞ。お風呂上りのスイカも待つてますよ」

▲主人公が立ち上がる

▲主人公が立ち去ろうと歩き出す

B⑤ 紬「お兄さん………そのつ、今日はありがとうございました！」

B⑤ 紬「宿題したり、お風呂したり…楽しかったです」

▲主人公が上記台詞「お兄さん」部分で立ち止まる

B① 紬「おやすみなさい」

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

## 【DAY1 チャプター13】

☆時刻：夜 場所：主人公の部屋

▲主人公が風呂から上がり、部屋で寝つ転がっている状態でスタート

(◇夏の夜の音)

(※ボイス 部屋の外から)

C⑧ 茉「おじやーん、 いるー？」

C⑧ 茉「茉、 もうねんねするから、 おやすみしにきたの」

C⑧ 紗「うーーーー、 大きい声出さないの。 お兄さんちょっと開けてもいいですか？」

▲紗が扉を開ける  
▲紗が扉を閉める

(※ボイス 部屋の外から解除)

B① 茉「あー、 おじやん寝てるー」

B① 紗「すみません、 そのまま横になつていてください。 やぐ済ませますんで」

B① 紗「ほーーー、 おやすみするんでしょう？」

B① 茉「うんーー、 おじさん、 おやすみなさいー」

B① 紗「(\*小さく笑う) じゃあお兄さん、 私たちもそろそろ横になります。 おやすみなさい」

B① 茉「おじやん、 ばいばーー」

▲紗が扉を開める  
(◇適宜動作音)

(※ボイス 部屋の外から)

C⑧ 茉「おじやーん、 明日も遊ぼうねー。 茉、 川いきたーー」

C⑧ 紗「だーかーーー、 夜は大きな声出しちゃダメって言つてたでしょー」

▲紗と茉が自室に戻る

♪S

▲主人公が立ち上がり電気を消す

▲主人公就寝

※うのまま田舎の夜の音を聴く

♪E

(◇適宜 フューチュアウト)

【DAY2 チャプター14】

☆時刻：夏過ぎ 場所：川

(◇環境：川 効果音など適宜調整)  
(距離・普通 [LRに二人ともそれぞれいる感じ どちらでも可])

A③ 蕉「ついたー！ おいらん！ ついたよ！」

A⑦ 紬「到着です。」<sup>トト</sup>が村唯一の自慢…ただの綺麗な川です」

A③ 蕉「あづ〜〜！ 蕉川で泳ぐー！」

A⑦ 紬「まあ見たまんまで、ただの川なんですけど。

「応」<sup>トト</sup>のお水はすごく綺麗で、川魚とかも沢山とれるんですよ」

C② 蕉「いち、にー、いち、にー」 ◇BGで小やく

C② 蕉「準備体操おわりー！」

A⑦ 紬「お兄さん、歩き疲れたと思いませんで、よければ川に浸かってみませんか？」

A⑦ 紬「座って足を浮かべるだけでも冷たくてすゞく気持ちいいですよ」

C② 蕉「蕉が最初にはいるー！」

▲蕉のみ川に駆け出して前方へ移動  
(◇上記▲に付隨する音)

C① 蕉「いちばんのりだー」 ^\*大声

A⑦ 紬「いー、つ、危ないから走らないのー。

あと、入る時はちゃんと靴脱ぐんだよー」 ^\*遠くに呼びかけ

▲蕉が川に入水  
(◇上記▲に付隨する音)

C① 蕉「もうお靴脱いだー」

A⑦ 紬「（溜息）まったく。言うこと聞かないなあ。いつも走るなつて言つてゐるのに」

（※距離・主人公と紬が石に座つてゐる間  
蕉の声のみ遠くですが、水をかけに来る時などは適宜調整ください）

C① 蕉「きやははは！ つべたくてきもちいー！  
ミサイル発射ー！ どーん！」 ^\*大きくはしゃぐ

▲蕉が川の水をバシャバシャと立てながら  
(◇上記▲に付隨する音)

A⑦ 紬「お姉ちゃんたちが行くまで  
あんまり遠く行っちゃだめだからねー」 ^\*遠くに呼びかけ

C① 蕉「わかってるー」 ^\*大声

A⑦ 紬「(\*ため息) 私たちも川辺に行きましょうか」

▲主人公と紬も川へ移動  
(◇上記▲に付隨する音)

A ⑦ 紬 「石が多いので、足元注意してくださいね」

▲主人公と紬が川辺に移動

絶一矢ノ琴力レシハカドシレシレシ用意持テガタニテ

C①  
某「わかつた！  
今度からちゃんとする！」  
^\*大喜^

袖「(\*ため息)ほんとにわかつてゐるのかなあ——へ\*独り言

⑦ 紗「あ、お兄さんは脱いだらちゃんとまとめて置いてくださいよ」

卷之三

▲上記台詞「ほらほらー」部分 桑が主人公と紬に対して川(

※(1)から(1)くらいまで移動するよ。にお願いします。

※(1)から(1)へいまで移動するようにお願いします

お兄さんの用意が済んでしまった。急いで力がいなして、

日(1)　葉一漂れても平気か。— 早く朝くがり いはいは

も  
しいが済んじないと怒る。」

日(か)の(へ)移動(いどう)をお願い(ねがひ)します

(※距離：1.5km)

○(1) 茄「おひきーん!  
はやくあそぼー!」

▲ 葉が川の奥に逃げつつ

紬 「全然聞いてないし……」(\*ため息) これはあとでお仕置きだな

紬 「お兄さん、お水かかりませんでしたか？」

⑦ 紗「よかつた。栄はあとでしつつかりこらしめておきますんで」

間

⑦ 紗 「私たちは、つと。こらへんに座りましようか。浅くて水も綺麗な川なので、足休めにはぴったりなんですよ」

## ▲動作の間

間

A⑦ 紬「あ、お兄さんの靴、預かりますね」

▲紬と主人公が靴を脱ぐ 主人公は脱いだ靴を紬に渡す  
(◇上記▲に付隨する音 適宜動作音)

A⑦ 紬「おお～、大きいー。  
ほら、栞の靴なんて、一緒に並べると小人の靴みたいに見えちゃいます」

A⑦ 紬「では、まとめてこの石の傍に置いて、つと」

▲紬が靴をまとめて置く

A⑦ 紬「さーて…裸足になりましたし、一緒にゆっくり座りましょうか」

A⑦ 紬「よいしょ～…と」

▲主人公と紬 岩に座って足を水に浸ける

A⑦ 紬「ん～～！ 冷たくてきもちい～。お兄さん、このひんやり加減、どうですか～？」

A⑦ 紬「ふふ～、よかつた。」今まで暑かつたと思いませんから、ゆっくり涼んでくださいね～」

▲間

A⑦ 紬「栞～！ お姉ちゃんたちはこっちに座つてるからね～」

C① 栞「ええ～つまんない～。おいさんもあそぶ～」～\*大げさにぶうたれる↙

A⑦ 紬「ダメ。もうちょっとしたらね。お兄さんは疲れたから、ちょっと休みたいんだって」

C① 栞「やだー。栞おいさんと遊ぶの！」

▲栞が川でバシャバシャ騒ぎながら  
(※遠巻きで栞が騒いでいる声のアドリブが欲しいです (現場相談) 次の栞台詞まで継続)

A⑦ 紬「（溜息）…栞つたら、いつもよりはしゃいじゃって」

A⑦ 紬「(\*小さく笑い) すみません。  
癒しを探しに来たはずが、なんだか子守りみたいになっちゃつてますよね」

▲間

A⑦ 紬「栞、夏休みの間、父に会つてないんです」

A⑦ 紬「だから、今日みたいに思いつきり遊べるのが、すっごく楽しいんだと思います」

A⑦ 紬「いつも私が肩車してあげようとする、『低いからやだー』って怒られますからね  
～\*笑いつつ～

(※遠くから聴こえる栞アドリブ 停止)

(◇適宜 アウト)

## 【DAY2 チャプター15】

☆時刻：昼過ぎ 場所：川

(◇適宜 環境音 場所は川のまま)

▲栄は遠くで一人遊んでいます 紗と主人公は横並びでスタート

A(7) 紗「やーって、栄が一人遊びに飽きないうちに、私たちはゆっくり涼みましょうか」

A(7) 紗「い」の大きな岩に寝転がって、田を閉じると気持ちいですよ」

▲紗が主人公の隣で横になる

(◇適宜 動作音)

A(6) 紗「うーん (\*伸び)。太陽があつたかーい」→\*気持ちよさそうに↙

A(6) 紗「お兄さんも、横になつてみてください。川の音もいい感じで、多分気に入りますよ?」

▲主人公が横になる  
(◇適宜 動作音)

A(7) 紗「どうですか?」

▲短い間

A(7) 紗「ふふふ、気に入つて貰えたみたいでよかったです」

A(7) 紗「川の音って涼しげで素敵ですよね~」

▲長い間

A(7) 紗「お兄さん、私、しばらく黙つてますね」

A(7) 紗「せつかくなんで、自然の音でゆっくり癒されていいでください」→\*優しく↙

→S

(◇い)から一定時間、環境音のみ)

→E

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

〔DAY2 チャプター16〕

★時刻：昼過ぎ 場所：川

▲主人公と紬は横並びで寝ていて、栞は遠くで遊んでいる状況でスタート

① 桑「ね——！」 力二——！ 力二——！

⑦ 紗「んー、あれ？ ちょっと寝ちゃってたかな…………？」へ＊寝起き／

讀書記

卷之三

見てあけるから ここち持つてきてこれらん  
ハ\*遠くに呼びかけ

アーティストのアーティスト

卷之二

もしかしてお兄さん  
寧はリ遠でか如き力一力にしまうが」ハシカレがい

あの子に付き合つてくれてありがとうございます」へ\*笑いつつ

ア  
⑦  
紺  
一  
葉  
！  
お兄  
ぎん  
か  
力  
二  
み  
た  
い  
ん  
た  
て  
！  
ち  
や  
ん  
と  
捕  
ま  
え  
て  
よ  
く

卷之三

▲主人公と紬が栄のもとへ歩いていく  
(◇上記▲に付随する音)

(※距離：栗と紺ともに遠く)

——とされ——  
大きいの捕れたの?  
見せてこらへ

あんた指挟まれて泣かないでよ～】  
～あんた～】からかい×

日(一)  
一  
勢  
強  
い  
か  
ら  
泣  
か  
な  
い

113

卷之三

B① 楽「あー（しばし思案）……カニさん、かわいそう。……じゃあ、楽、バイバイする！」

A(7) 紬「よし！いい子だぞー！」

B(1) 蕉「わかった！じゃあ、カニさんにさよならして、岸で日向ぼっこしに行こ？」

A(7) 紬「ふふっ。あんた、そんな挨拶どこで覚えたの？」  
B(1) 蕉「隣のおばあちゃん、見てるテレビ。どお？ 蕉かっこよかった？」

A(7) 紬「(クスツと)かっこいいはかつこいいかもだけどなんか間違った相手に使いそうで怖いなあ」

B(1) 蕉「ねえ、おいさん？ 岸までかけっこしよ！ 蕉勝つたら、かき氷たべたい！」

A(7) 紬「蕉く、勝手なこと言わないのー。お兄さん困らせちゃダメだよ」

B(1) 蕉「??？ お姉ちゃん、かき氷いらない？」  
A(7) 紬「うつ…………」

B(1) 蕉「ねー、『うつ』ってなにー？」  
A(7) 紬「そりやあ、ね？ お姉ちゃんもかき氷は食べたいよ？ ……でも、今月のお小遣いもうほとんど残っていないの、だから

### ▲短い間

B(1) 蕉「??？ おいさんかけっこしなくても買っててくれるのー？」

A(7) 紬「私達の案内のお礼に……ですか？ いえいえそんな！ 大した事はしていませんし、氣を使わないでくださいー。」

B(1) 蕉「おー。おいさん、お金持ちだ！」

B(1) 蕉「蕉、かき氷デラックス！」

A(7) 紬「ちょっと、勝手に話を進めないのー！」

B(1) 蕉「だつて、おいさんがー！」

A(7) 紬「……うーん、ほんとに『馳走になつていいんでしょうか？ 蕉だけじゃなくて私まで』

B(1) 蕉「おいさんが、いいよつて言つてる。お姉ちゃん、かき氷いらない？」

A(7) 紬「そ、そうだよねー！ じゃ、じゃなくて」

B(1) 蕉「はやくしないと、おいさん買ってくれなくなつちゃうかもしれない。ね、おいさん？」

A(7) 紬「そ、そんな待つてよ」  
A(7) 紬「う、宇治抹茶を」  
A(7) 紬「う、宇治抹茶を」  
A(7) 紬「う、宇治抹茶を」

### ▲長い間

A(7) 紬「う、宇治抹茶を」  
A(7) 紬「う、宇治抹茶を」

B① 蕉「お姉ちゃん、何言つてるかわかんない」^\*不服そう^

A⑦ 紬「え、えつと……その！ 宇治抹茶金時を食べたいです！」^\*大き目の声^

B① 蕉「あー。それ前にお母さんに高いって怒つてたやつ」

A⑦ 紬「う、うるさいな！ せつかくだから食べてみたかったんだもん！  
私のお小遣いだけじゃ高くて全然買えないし！」

A⑦ 紬「それにあんただって、デラックスかき氷とか言つてたじやん！」

B① 蕉「うん、蕉はデラックス。ねーね、おいさんしやがんで。肩車」

B⑤ 蕉「えへへー。あいがと」

B⑤ 蕉「んしょ、つと」

▲上記台詞^言いつつ主人公の背中から登つて肩車の形になる

▲短い間

A⑤ 蕉「よーし、おいさん口ボ、発進！」

A③ 紬「あ！ 蕉ばっかりずい！ 私がお兄さんの案内係なんだからね！」

A⑤ 蕉「べーつだ！ おいさん口ボ、がつしゃーんがつしゃーんだよー！」

▲主人公と肩車状態の蕉走り出す  
▲紬はゆっくり追いかけてる

B④ 紬「そもそも、私はお姉さんだから、そんな子供みたいなお願ひしないだけでー」

A⑤ 蕉「おいさん、ストップ！」

^\*一個前の台詞に被せ気味^

▲蕉が主人公の頭を叩き、肩車状態で二人とも停止

A⑤ 蕉「宇治抹茶の人はやくー。早くしないとお母さんに言いつけてやるー」

B④ 紬「なつ！ お兄さん！ そこでじつとしていてください、今お仕置きしちゃいますんで」

A⑤ 蕉「きやははは、宇治抹茶の人怒つたー。おいさん口ボ発進！」

▲主人公と肩車状態の蕉走り出す

C④ 紬「こらつー！ ていうか、なんでお兄さんまで逃げるんですかー！」

A⑤ 蕉「駄菓子屋あつちだよ！ おいさん、逃げろー」

C④ 紬「あ～もう！ 待つてつてばーー！」

(◇適宜 フェードアウト)

【DAY2 チャプター17】

☆・時刻・夕方前 場所・駄菓子屋前から店内

A(3) 茉「かき氷ー、かき氷ー。なしつにぴったりかき氷ー。ウルトラー、ハイパー、デラックスー」  
～\*鼻歌交じりで上機嫌～

A(3) 茉「あ！ でも、お菓子も食べたい。 ねーね、おいらん、茉お菓子も食べたい！」

B(7) 紗「うーー。お兄さんの服引つ張らないの！ シヤツ伸びちやうでしょ」

A(3) 茉「うーー、お姉ちゃんに言つてない！ おいらん、茉お菓子も食べたい！」

B(7) 紗「そんなんに食べたらお腹壊すよー」

A(3) 茉「茉強いから平気だもん」  
～\*ふでくされ～

B(7) 紗「はいはい。ほーら、ふでくされてないで、駄菓子屋さん入るよ」

▲ 紗が駄菓子屋の引き戸を開ける

A(8) 紗「(う)めんぐださーい」  
～\*呼びかけ～

A(3) 茉「くださーい！」  
～\*大声～

A(8) 紗「かき氷を買いにきたんですけど、駄菓子屋のおじいちゃんいますかー？」  
～\*呼びかけ～

A(3) 茉「おじーちゃん、かき氷買いにきたー」  
～\*呼びかけ～

(※距離・おじいちゃんの声のみ遠くから近づく感じ)

C(1) おじさん（以下・爺）「はいよー、ちょい待つてなあー。  
この声は紗ちゃんと茉ちゃんかねー？」

A(3) 茉「そうー。おじいちゃん、かき氷ー」

A(8) 紗「茉ー。おじいちゃん急かさないの。  
ゆつくりで大丈夫ですのでー」

(※距離・普通 方向・正面)

B(1) 爺「はいはい、いつもありがとさん。茉ちゃん、紗ちゃん、お待たせねえ」

B(1) 爺「ん？ おや、お兄さん見ない顔だねえ？ こら辺の人かい？」

A(7) 紗「おじいちゃん。こちらのお兄さんは夏の間だけウチに泊まってるんですよ。  
でも昔は近所に住んでたんですよ」

B(1) 爺「ほへえー、そうかいそうかい。年寄りはすぐ顔を忘れちまうけえの。  
いいねーお兄さん、別嬪さん携えて、両手に華だ」

A(7) 紗「え？ あ、あの違いますっ！」

B(1) 爺「お兄さんは紗ちゃん狙いかえ？ さすがに茉ちゃんは小さいから  
あ、でも将来はうちのばあさんと同じくらいべっぴんになるで」

A(7) 紬「おじいちゃん！　お兄さんはそういうんじゃないですから！」

A(7) 紬「それに、家族ぐるみの付き合いでもあるのでもはや血縁関係に近いというかなんというか」ヘ\*テンパリ小声\

A(3) 葉「おじいちゃん、お花って？　おいさんお花持つてないよ？」

B(1) 爺「がはははは。華つちゅうのは、葉ちゃんや紬ちゃんみてえな綺麗なお嬢ちゃんのことでえの」

A(3) 葉「葉、お花ー！」

B(1) 爺「んだんだ、将来は綺麗な御華が咲くけえの」

A(7) 紬「はい！　もうその話は終しまい！」

おじいちゃん、私達はかき氷を買いに来たんです！」ヘ\*照れ怒り\

B(1) 爺「お〜お〜紬ちゃんはこわかこわか。こりやお兄さんも、もうちつとしたら尻に敷かれてしまうわい」

A(7) 紬「お・じ・い・ちゃん？　そろそろ注文してもいいですか？」ヘ\*ドドドドドドドつて怒る\

B(1) 爺「ああああ、こりや敵わんて。んで、今日はどのかき氷にするんかね？」

B(1) 爺「ウチの駄菓子屋はかき氷の味がいっぱいあるから、選びたい放題じやけえ」

A(3) 葉「葉、デラックス！　デラックスかき氷ー！」

B(1) 爺「おく！　デラックスかい？」

葉ちゃんはお金持ちだねえ！　そりやうちで一番豪華な奴だ」

A(7) 紬「ちょっと葉！　それってそんな高いやつだったの？」

葉「うん。でも葉平気。おいさんが買ってくれる！」

B(1) 爺「かつかつか。そうかいそうかい。そりやお兄さんも大変じやな」ヘ\*笑いつつ\

A(3) 葉「ね〜。おいさん、大変だ！」

A(7) 紬「もー、あんたの事なんだからねえー」

A(3) 葉「おいさんね、太つ腹なんだよ！　葉、早くかき氷食べたい！」ヘ\*おじさんに向けて\

A(7) 紬「お兄さん、先ほどから失礼ばつかりでほんとにごめんなさい。ていうか、そもそもほんとにいいのか不安になってきたなあ……」

B(1) 爺「んじゃ氷削るから、葉ちゃん、ちょっとまつとってね」

B(1) 爺「……あ、そうじやそうじや。んで紬ちゃんとそこのお兄さんはどうすんだい？」

B(1) 爺「なんもいらんのなら、葉ちゃんの分だけ氷持つてくるけえの」

A(7) 紬「えっと、私は……やっぱり悪いので」

A(7) 紬「えつ？ お兄さん？」

B(1) 爺「はいはい、お兄さん注文ありがとうございます。」

んなら、デラックス一つと宇治抹茶とブルーハワイね  
全部で3つ分の氷持ってくるけえの」

▲おじいちゃん店の奥に遠ざかる

A(7) 紬「あ、ありがとうございます！」

……ほら！ 茄もちゃんとお兄さんにお礼して！」 × もじもじ×

A(3) 茄「おいさんあいがと。茄うれしい！」

A(7) 紬「私、両親以外から何かをご馳走になるなんて初めてです！」

…ま、まして、それが男の人なんて……」 × 「ま、まして」 照れつつ早口×

A(3) 茄「くるしゅうない。おじいちゃん早くデラックス作ってー」

A(7) 紬「（ため息）もー、なんあんたが偉そーなの。あと、おじいちゃん急かしちゃダメだよ」

A(3) 茄「むふふー」

▲おじいちゃんがみんなの前に戻つてくる  
(※距離：普通 方向：正面 おじいちゃん)

B(1) 爺「あ、ほいほい。待たせたねえ。

これで今から氷を削つて、特製かき氷作るけえの」

▲氷削る機器と氷をカウンターに置く

A(2) 紬「おおおおお。氷、でっかい！」

A(7) 紬「立派な氷ですね！ これで三人分ですか？」

B(1) 爺「ん、少し大きかつたかもしけんなあ。  
あああそこは、じいちゃんからお嬢ちゃん達へのサービスかの」

A(2) 茄「やつた！ 大盛りデラックスになる」

A(7) 紬「ありがとうございます」

B(1) 爺「んなら氷、削りはじめようかね」

▲おじさんがかき氷を作り始める  
(◇上記▲に付随する音 氷を削る音 繼続適宜)

A(7) 紬「おおおお」

A(2) 紬「わあー」

A(2) 紬「こうやって目の前で見ると、氷を削る音が豪快ですね」

氷「（）り（）りしてます。」

B① 爺「この取っ手をぐるぐる回せば、誰でもできるけえの」

B① 爺「どれ、栞ちゃんもちょっとやってみつか?」

A② 栞「やるー。栞かき氷作る!」

A② 栞「いいんでしようか? というか…栞にもできる事なんですかね?」

B① 爺「できるできる。だれでもできる。この取っ手を回すだけじゃからのう」

A② 栞「簡単だ!」

(◇氷を削る音 一回停止)

B① 爺「んじゃ、ワシが今削った一人分は、そうねえ、お兄さんの分にしようかねえ」

B① 爺「栞ちゃんこつちおいで。こりや夏休みの体験学習だて」

A② 栞「むふふふ」

▲栞がおじさんの傍へ移動

B① 栞「おじいちゃん、栞なにすればいい?」

B② 爺「まずは、ここの木の棒んとこしつかり握ってみ?」

B① 栞「ここのを…?」

B② 爺「そうそう、ぎゅーって。したらしつかり力入れて、時計回りにぐるぐる回すだけやで」

B① 栞「とけい、まわり…………?」<sup>ヘ\*</sup>思案<sup>▽</sup>

A⑦ 紗「栞、わかんないのー? 時計回りはお母さんに習ったでしょ?」

B① 栞「うー。えっと、こつち」

(◇上記▲に付隨する カき氷機の音 繼続)

A⑦ 紗「(\*小さく笑い) 合ってるんだけど、なーんか当てずっぽうっぽいなあ」

B① 栞「ぐるぐるぐるー、ぐるぐるぐるー」

A⑦ 紗「(笑)、ゆっくりでいいからね。かき氷作る機械、壊さないでよー」

B② 爺「おおおお、栞ちゃん、なかなか筋がいいのう。こりやおいしいかき氷になるなあ」

B① 栞「栞作ったの、おいしいのになる?」

B② 爺「なんだ。これで作ったらお店に行列できるかもしけんなあ。栞ちゃんが削った氷はデラックスに使うけえ」

A⑦ 紗「よかつたね栞。将来かき氷屋さん開けるんじゃない?」<sup>ヘ\*</sup>笑いつつ

B① 栞「ん~……」<sup>ヘ\*</sup>考え込む感じ

(◇上記▲に付隨する カき氷機の音 停止)

A(7) 紬「どしたの栞？」 黙り込んでる

B(1) 栞「おじいちゃん」

B(2) 爺「？？？ なんじゃいね？」

B(1) 栞「栞が作ったやつほんとに美味しい？」

B(2) 爺「んだ、上手にできるけえの。ほつぺこぼれ落ちるだろうぞ」

B(1) 栞「ん~。それなら、おいさんとお姉ちゃんに使って  
^\*「ん~」部分思案 その後1拍入れてほしい~」

B(2) 爺「？？？ オ~オ~、そうかいそうかい（納得）。

したらお兄さんと紬ちゃんのかき氷はとつてもおいしいねえ」

B(1) 栞「うん~」^\*あつけらかんと~

(◇上記▲に付隨する かき氷機の音 再開)

A(7) 紬「ふふ~、栞ったら」^\*小声~

A(7) 紬「ありがと、お兄さんもお姉ちゃんも、栞のかき氷楽しみにしてるからね」

B(1) 栞「うん！ 栞、一人でやる。おいさんとお姉ちゃんは、お外で待ってて」

A(7) 紬「え~、大丈夫かなあ。ぼけーっとしてケガしないでよ~」

B(2) 爺「大丈夫大丈夫、ワシがちゃんと見てるけえの」

B(1) 栞「いーからはやく、あっち行つて！」

A(7) 紬「はいはい、わかったわかった。じゃあ栞に任せらからね」

B(1) 栞「うん」

A(7) 紬「お兄さんと外のベンチに座つてるから。おじいちゃん、よろしくお願ひします」

B(2) 爺「はいよ、まかせとき~」

B(1) 栞「まかせとき~」

▲主人公と紬が駄菓子屋の外へ

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

## 【DAY2 チャプター18】

☆時刻：夕方前～夕方 場所：駄菓子屋前ベンチ

（※ベンチに三人座る場合、左右に栂と紬が座り主人公が挟まれるようにお願いします）

▲駄菓子屋前のベンチに紬と主人公座ってる 栂は店の中の状態でスタート

（◇夏の外 セミの声など環境音 適宜）

▲駄菓子屋の扉を開けて栂が出てくる

（◇扉の開く音など 適宜）

B④ 栂「おまたせしました！ 宇治抹茶とブルーハワイのかき氷です！」

▲栂が歩いてかき氷を持ってくる

※B④からA⑧へ移動するようにお願いします

A⑧ 栂「いわ～宇治抹茶になります」

▲紬が栂から宇治抹茶を受け取る

A⑦ 紬「おー、ちゃんとかき氷になつてる。山盛りですっ！」／おいしそう。ありがとうございます栂」

A① 栂「いわ～ブルーハワイになります」

▲主人公が栂からブルーハワイを受け取る

B① 栂「それでは、ごゆっくりどうぞ」

▲栂が駄菓子屋の中に戻っていく

A⑦ 紬「え？ あんたどこ行くのー？」

A⑦ 紬「？？？ お店の中に戻っちゃいましたね」

（※栂とおじさんの声 店の中から）

C④ 栂「おじっちゃん！ 栂、ちゃんと運べたー！ かつ！」／よくお仕事できたー！」

C④ 爺「おーおー、立派なもんじゃて。んじゃこれはご褒美じゃな」

C④ 栂「わー！ でつかい！」

A⑦ 紬「ふふつ。あの子つたら、すっかり駄菓子屋で働いてる気分になつてるみたいですね」

（◇上記栂の台詞に被せ気味で※編集時被せます）

C④ 爺「よー、完成じゃな。ほれ、栂ちゃんもお外にかき氷もつてき

C④ 栂「うんつ！ あいがとー」

▲栂が再び戻つてくる

A③ 蕉「みてー！ みてー！ 蕉の、でっかいイチゴ乗ってる！」

A⑦ 紗「わあー、大きいねー！ きっと蕉が頑張ったから、おじいちゃんがおまけしてくれたんだよ」

A③ 蕉「うんっ、蕉がんばったー！」

A⑦ 紗「そうだね。じゃあ溶けないうちに、一緒にベンチ座って食べよっ」

A③ 蕉「あーい」

▲蕉もベンチに座る

A⑦ 紗「よーし、準備できた？」

A③ 蕉「できたーー！」

▲間

A⑦ 紗「ではでは～、おいしそうなかき氷を作ってくれた蕉さんに感謝して～」  
^\*「ではでは～」仰々しくv

A③ 蕉「むふふ～」^\*得意げv

(△一個前の紗台詞「蕉さんに感謝して～」部分に被せる感じでお願いします※編集時)

A⑦ 紗「せーのー！」

▲「せーのー」部分で全員手を合わせる

A③ 蕉「いただきまーす！」  
「いただきまーす！」

▲三人でかき氷を食べ始める

▲蕉と紗「かき氷を食べているアドリブ」（現場相談）

A③ 蕉「冷たくて、おいしい！」

A⑦ 紗「ねー、ほんとおいしいね。  
あっ、そうだ蕉～。服にこぼさないでお行儀よく食べてよー？」

A⑦ 紗「前に蕉がシロップこぼした時、  
『ちゃんと見てて』って私がお母さんに怒られたんだから」

A③ 蕉「わかったー！」

S♪

▲蕉と紗「かき氷を食べているアドリブ」（現場相談）

A⑦ 紗「（ため息） 今日も暑かったから

かき氷を食べると身体の芯から冷える気がしますね】

ア  
③  
茱一さん  
なんか頭キーンってなる

四

ア  
③  
茉一様  
おしゃんも  
おいじい?

第一葉の分離力の  
元氣い

卷之三

栗 「はい、あ——ん

▲主人公に栄が

A ⑦ 紬「ちょ！ あんた何してるのっー？」

A ③ 栗「おいしい？」

栗 えへへ!! 元テッケスおいしいでしょ!!

ア  
③  
葉一そが！  
お姫ちゃんのも  
おしさんはあけて！」

卷之三

卷之三

沈默  
紺赤面

A(7) 細 「そ、そりや、恥ずかしいからに決まつてゐるでしょ」  
^\* 「恥ずかしい」部分すごく小声^

茱「？」^\*思案▽

菜  
—あー！  
わかつたー！  
お姉ちゃん、おいしいから独り占めしてるんだ！

別にそういうわけじゃなくて

A (7) 紬「だから違うってば」

⑧ 葉 「けちんぼするなら、貸して！」

▲立ち上がり栄が紬のもとへ移動

主人公が渠の方向を向く

A(7) 紬「ちょ、なにするの！」「うーん、それ私のー！」

▲栞が紬のかき氷を奪う

A(1) 栞「お姉ちゃん、けちんぼはダメなんだよ！　はい、おいさん、あーーーん」

▲栞が主人公に食べさせる

A(1) 栞「どう？　宇治抹茶、おいしい？」

A(1) 栞「えへへー。栞は、優しいの」

A(1) 栞「おいさん、もういらぬ？」

A(1) 栞「わかったー。じゃあお姉ちゃんに返すー」

▲栞が紬にかき氷を返そうとする

A(8) 栞「？？？」

A(8) 栞「お姉ちゃん？　なんか、お顔まつかだよ」

A(8) 栞「ねーねー、おいさん、お姉ちゃんお顔まつかー」

A(7) 紬「お、お兄さんが、私のスプーンで……か、関節キス」^\*小声^

A(8) 栞「ねーえ！　どして、おいさん笑ってるのー」

▲紬が急に立ち上がる

A(7) 紬「あ、あのー、わわわ、私先に帰つて、飯の支度手伝つてますから！」

A(7) 紬「そ、その、ご馳走様でしたー！」^\*テンパリまくり^

▲上記台詞「ご馳走様」部分位から家に向かつて走り出す  
※A(7)からC(7)へ移動する感じ（後処理？現場相談）

▲長めの間

A(1) 栞「おいさん、お姉ちゃんいつちやつたー」

▲短い間

A(1) 栞「なんで帰つちゃつたんだろうね？　へんなのー」

▲間

A(1) 栞「これ、栞が二つとも食べてもいい？」

A(1) 栞「やつたー」

A(1) 栞「うん、食べたら、おうち帰る」

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター19】

☆時刻：夜 場所：居間

▲一同、手を合わせる

一同 「(＼)馳走様でしたー」 (母B①、紬A⑦、B⑧)

B① 母 「いやー、うまかつたうまかつた」

A⑦ 紬 「ちょっとお母さん、飲みすぎだよー」

B① 母 「いいのいいの。ほら、あれだあれ！」

若い男の子がいるからさー。ご飯も酒も、いつもより進むつてもんだ」

B⑧ 茉 「お母さん、顔まっかー」

B① 母 「あははは、そんなんに、あたし顔赤いかー？」

紬 「うん、もう真つ赤だよ。

ほーつら、お兄さん付き合わせてないで。そろそろお酒は没収だからねー」

▲上記台詞で紬が立ち上がり 「ほーつら」 部分で酒瓶を没収  
(◇適宜 動作音)

B① 母 「あ、ちょっと、返せよ！ まだ飲みたりないんだから！」

B① 母 「大体お前らはさあ、昼間こいつに遊んで貰つてたんだろー？ だつたらあたしの酒にも付き合わせるのが道理だろうよー」 ヘ\*不満そうに↙

B⑧ 茉 「茉、おいらと川行つて遊んだー！ あと、かき氷買つてもらつた！」

B① 母 「ほー、かき氷まで買つてもらつたのかー。いたれりつくせりだなあ」

B⑧ 茉 「いたでり？ よくわかんないけど、かき氷おいしかった！」

B① 母 「んで茉、ちゃんと何かお返ししたのかー？」

B⑧ 茉 「うーん。なんもしてない！」

B① 母 「(ため息) お前なー。それじゃ立派な大人になれないぞー」

B① 母 「いつも言つてるだろ？ ちゃんとお礼はしなきやいけないんだって。どーれ、ちょっとお仕置きしてやる」

▲お母さんが茉にちょっとかいを出す

B⑧ 茉 「きやはははははは」 ヘ\*くすぐられてるようにはしゃぐ↙

B① 母 「紬はどうなんだー？ どうせお前もかき氷食つたんだろー？」

A⑦ 紬 「え、えっと、今日はまだだけど、昨日はちゃんとしたよ？ 宿題見て貰つたりしたから」 ヘ\*小声↙

B① 母 「それで？」 ヘ\*わざとらしくいじわるな感じ↙

A(7) 紬「昨日は……お兄さんに耳かきを」<sup>ヘ\*</sup>小声でどんどん尻すぼみになる

B(1) 母「んー？ 声が小さくて聞こえないぞー」

A(7) 紬「昨日はお兄さんに耳かきしてあげたって言つてるのー！」

母「あー？ 耳かきだあー……？ あーああ、全然ダメダメ。  
紬は発想がお子ちゃまだわ」<sup>ヘ\*</sup>わざとらしく、やれやれつて感じ

B(1) 紬「ちつ、違うよ！ これはお兄さんの希望で」

A(7) 母「あー、みなまで言うな。  
どうせ『私が出来る事であれば』とかこいつに言つたんだろう？」

A(7) 紬「そ、それは確かにそうだったけど」

B(1) 母「かー。栞、お前のお姉ちゃんは甘いわー」

A(7) 栞「そうなの？」

B(1) 母「うん、そう。  
だつて自分が出来る事しかお願いとして受け付けてないんだから、そりやあ甘々だ」

B(8) 栞「へえー、お姉ちゃん甘いんだー」

A(7) 紬「(ため息) だつたらどうすればいいわけー？」<sup>ヘ\*</sup>呆れ

B(1) 母「んー、なんつーかな。  
もつとさあ、ストレートにこいつが喜びそうな事してやれよー」

B(8) 栞「お母さん、おいさんが喜ぶ事つてなにー？ 栞もするー」

B(1) 母ん「うーん。例えば、そうだなあ……  
男相手なんだから、一緒に風呂入つて、背中流すとか？」

A(7) B(8) 栞「お風呂ー！ お風呂栞も入るー！」

B(1) 母ん「うーん。例えば、そうだなあ……  
男相手なんだから、一緒に風呂入つて、背中流すとか？」

A(7) B(8) 栞「そ、そんな事できるわけないでしょ！」

(◇上記台詞 ほぼ同時くらいで※編集時調整)

B(1) 母「ああうつさうつさい。大声出すなよな。耳が痛くなるだろ」

A(7) 紬「そ、それはお母さんがバカな事言うから」

B(1) 母「バカな事つてなんだよバカな事つてー」<sup>ヘ\*</sup>不服そう

B(1) 母「我ながら、かなりのナイスアイデアだろ」

A(7) 紬「お母さん？ 次、お兄さんの前で変な事言つたら、一ヶ月お酒禁止だからね」<sup>ヘ\*</sup>ゴゴゴゴゴつて怒る感じ

B(1) 母「ひー、こわいこわい。じゃあ怒られないうちに、そろそろ一番風呂いただこうかねー」

B(8) 栞「栞も一番にはいるー！」

▲お母さんと栞がじゃれ合う

B (8) B (1)  
母 「おーよしよし、じゃあ一緒に入ろう」「きやははは」※など言いつつ（アドリブ現場相談）

（△適宜 動作音）

A (7)  
栞 「（ため息）食器、片付けてくるからね。あとお母さんのお酒も」「あっ、おい！ やめろ！」

▲栞が食器を下げに台所に出ていく  
(△適宜 動作音)

B (1)  
母 「ちえー（\*独り言）」。  
少しはお母さんのナイスアイデアも検討してみろよー」へ\*遠くに呼び掛ける感じ

B (8)  
栞 「お姉ちゃん、おこってたー」

B (1)  
母 「なあー（\*同意する感じ）。よーし栞っ、そいじゃお風呂行こつか」

B (8)  
栞 「うんっ！ お風呂入る！」

▲栞が立ち上がる  
(△適宜 動作音)

B (8)  
栞 「おいやん、栞お風呂入ってぐるー」

B (1)  
母 「よいしょ」と

▲上記台詞でお母さんが立ち上がる  
(△適宜 動作音)

B (1)  
母 「お前も軽く食休みしたら、ちゃーんと汗流せよー」

B (8)  
栞 「おいやん、ばいばーい」

▲居間から栞とお母さんが出ていく  
(△適宜 動作音)

（※居間の外から）

C (8)  
母 「あーそうそう、あたしの裸見たかったら覗いてもいいぞー」へ\*適当な感じ

（△適宜 アウト）

【チャプターEND】

【DAY2 チャトタ-20】

★時刻：夜 場所：風呂場

▲主人公が風呂場の扇を開け 入室 その後扇を閉める  
▲主人公が風呂場の椅子をずらし座る

### ▲主人公がシャワーを流す

（下）和風の田園

田中さん！ せんせーといひですか！」 ヘンハで大きめの声で

⑥ 細 あ あの後 母に言われた事を私なりに考えてみたうえで

▲主人公シャワーを止める

B ⑥ 紗「いいいい、今からとんでもない事を口走りますが、絶対に断らないでください！」  
^\*テンパリ^

冷静に断られても

B⑥ 紗「そう……だから、これは宣言なんです。宣言ですよお兄さんー。」

「最初からお兄さんに決定権はない話なんですっ！」

▲長めの間

B⑥ 紬「(\*深呼吸)」

〔6〕 細 一 よし……では、宣言します〕 へ\*小声独り言々

間

B ⑥ 紗「わ、私、白川紗は、今から準備をしてお兄さんの背中を流しに参りますっ！」  
^ \* 勇気を出した大声▽

▲主人公がシャワーへッドを落とす  
（◇何か『衝撃』って感じの演出をお願いします）

B⑥ 紗「だつ、大丈夫ですかつ！ すゞい音がしましたけど！」

⑥ 紬（たぬき） よかた シヤツリヘットの音たつたんですね。

短い間

⑥ 紬「し、仕切り直してもう一度だけ言いますね」

B⑥ 紗「準備をしたら、お兄さんの背中を流しに来ます……」

⑥ 紗「も、もちろん、タオルは巻いてきますし、厳重なガードは敷く予定ですので」

緑  
だからつ、そのつ……

「(\*一回深呼吸)お、お兄さんも、前はタオルで隠しておいてください」  
「（恥ずかしがる）」

## 【DAY2 ナヤプター-21】

☆時刻：夜 場所：風呂場

▲主人公が風呂場の椅子に座っている 紬は風呂場外にいる状況からスタート

B(6) 紬「お、お兄さん、準備が出来たので入りますね」

B(6) 紬「し、失礼します」

▲紬が扉を開けて風呂場に入る

▲ヒロインが主人公の後ろへ

A(5) 紬「ま、まだ薄田しか開けてないんですけど  
ちゃんと隠してくれますよね?」  
^\*おじやべり>

A(5) 紬「で、ではしつかり田を開けますよ」  
^\*恐々恐々>

A(5) 紬「お~。これなら大丈夫そうです」

A(5) 紬「(\*小さく笑う)お兄さん、背中大きいですね。  
頼りがないのある後ろ姿って感じがします」

▲短い間

A(5) 紬「えっと、あまり長居するのもあれなので、早速ですが流し始めますね」

A(5) 紬「あ、あとお母さんには内緒にして下さい。絶対からかわれますから」

A(5) 紬「(\*小さく笑う) ありがとうございます」

A(5) 紬「お兄ちゃんシャワーへッドお借りしてもいいですか?」

▲紬がシャワーへッドを主人公から受け取る

A(5) 紬「ありがとうございます」

A(5) 紬「身体が冷えちゃったかもしないので、まずは一度流しましょうか」

♪S

▲紬が蛇口をひねってお湯を手に当てる温度確認

A(5) 紬「お湯の温度はこれくらいで大丈夫かな」  
^\*独り言>

A(5) 紬「では、首当たりから流していきますね」

▲紬が後ろから主人公にシャワーをあてる

A(5) 紬「熱かったら言ってください」

A(5) 紬「あ、あと自分からお背中を流しますとか言い出しておいてあれなんですけど……」

A(5) 紹「目が合つたりすると恥ずかしいので、あまりこつちは向かないでくださいね」

A(5) 紗「それに、いくらタオルで隠してるとはいえ、その、あんまり自信ないですから」

A(5) 紬 「そろそろあつたまりましたかね？」

A(5) 細 「じゃあシャワーは」のくらいにして「へ\*独り言>

▲ 細がシャワーを止め、シャワーへッドを置く

A ⑤ 紬「タオル泡立てちやいます」

▲紺がタオルを手に取り、ボディーソープを泡立て始める

「ボディーソープたつぱりですよ」

（5） 細  
—よーし、  
充分泡立つたかな】へ\*独り言

紹一ではお背中洗っていきますね。」

▲紺が主人公の背中を洗い始める

紹一 ますは首の方からしつかり擦ります

（5）細いしきりますよ。」

力加洞とか力丈夫ですか?」

緑一では少し強く力を入れますね

卷之三

緑一こゝが感じてとてし

卷之三

續  
卷  
之  
三  
法  
一  
之  
不

▲紬がシャワーへツドを持ち、温度を確認後、主人公の背中を流す

ア  
⑤  
袖  
「シャツリ、  
流しますね」

A (5) 紹 「さつきと同じ温度ですけど大丈夫ですか？」

A(5) 細 「(\*小さく笑う) わかりました。もう少し熱くしますねー

「どうでしたか？」  
背中流し

A⑤ 紗「(\*小さく笑う) 喜んで頂けたみたいでなによりです。  
勇気を出した甲斐がありました」

A⑤ 紗「あ、そうだ」

A⑤ 紗「よければお兄さんの頭も洗つてみていいですか?」

A⑤ 紗「せつかくなので。」  
「はとことん経験してみようかと思いまして」

▲短い間

A⑤ 紗「どうでしようか?」

A⑤ 紗「(小さく笑う) ありがとうございます。なんだか楽しくなつてきちゃつて。」

A⑤ 紗「じゃあ一旦シャワー止めますね」

▲紗がシャワーを止めてシャワーへッドを置く

A⑤ 紗「シャンプー、シャンプー」

A⑤ 紗「私の使つてるシャンプーで大丈夫ですか?」

A⑤ 紗「(\*小さく笑う) ジゃあこれで」

▲紗がシャンプーを手に出す

A⑤ 紗「よーし、では洗い始めますね」

▲紗が主人公の頭を洗う

A⑤ 紗「まずは全体が泡立つように」

A⑤ 紗「かゆい所はございませんか?」

A⑤ 紗「(\*小さく笑う) やっぱりこの台詞は言つてみたくなりますね」

A⑤ 紗「耳の周りもしつかりと~」

A⑤ 紗「気持ちいいですか?」

A⑤ 紗「お客様ー、首のほうを洗いますので、少し頭を前に倒してください」

A⑤ 紗「(\*小さく笑う) ありがとうございます」

A⑤ 紗「前髪の方を洗うので、しつかり目を瞑つていてくださいね~」

A⑤ 紗「最後は全体を軽くマッサージして、と」

A⑤ 紗「おつけーかな。よし、頭流しますねー」

▲紗がシャワーへッドを取り シャワーを流す

A⑤ 紗「まずはしつかり泡を流して」

A⑤ 紗「毛穴にシャンプーが残らないように、軽く手を動かしますね~」

A⑤ 紗「痛くないですか？」

A⑤ 紗「(\*小さく笑う) それならよかったです」

A⑤ 紗「このままもう一度身体も流しちゃいますね」

▲ 紗が主人公の身体を再度流す

A⑤ 紗「もういいかな…………うん、しっかり流せたと思います」

▲ 紗がシャワーを止めて シャワーへッドを置く



A⑤ 紗「お終いです、お疲れ様でした」

A⑤ 紗「あ、いえいえお礼なんて。私も途中から楽しんじゃってましたし」

▲ 間

A⑤ 紗「さーつて、あとは軽く片付けて…」

▲ 茉が風呂の扉を叩く

B⑥ 茉「お姉ちゃんいるのー？ 茉おもちゃ忘れたから」

A⑤ 紗「え！？ ちょっと待って」

B⑥ 茉「入るよー」

▲ 茉が風呂の扉を開ける

B⑥ 茉「ごめんね。茉おもちゃ忘れたの……」

▲ 間

B⑥ 茉「？？？」^\*首を傾げる感じ

B⑥ 茉「あれ？」

A⑤ 紗「えっとね」

B⑥ 茉「ねー、なんで、おいさんとお姉ちゃん、二人でいるのー？」

A⑤ 紗「え、えーっと、これはね！ お兄さんの背中とか流してただけで、その、変な事じやないんだよ？」

B⑥ 茉「そうなの？」

A⑤ 紗「仲良しさんだから、背中流してあげてるだけなの」

B⑥ 茉「じゃあ茉とお母さんと一緒に！」

A⑤ 紗「そう！ それと一緒になのー！」

④ 茉「わかつたー！」 じやあ茉おもちや取つたから出でるー」

A  
⑤

栗 おかあさーーん

## ▲葉が風呂場から出していく

粟がトテトテ走つて遠くへ

四

續一得一九一

A⑤ 細 「(\*ため息)お母さんに知られたら、後ですつごいからかわれるだろうなー」

# ▲ 短い間

⑤ 紬 「では私は後で入りなおすので、先に出てますね」

A(5) 紹「さっき葉、『花火やるんだー』って意気込んでましたから

## ▲短い間

A ⑤ 紗「あつ、もしよければ、お兄さんも涼みがてら来てください」

A (5) 細 「(\*小さく笑う) ありがとうございます。お兄さんが来てくれば菜も喜ぶと思いますんで」

A(5) 紗「はい。では先に上がつて待つてますね」

## ▲ 細が風呂場から出ていく

(△過面 乃や)

【チャプターEND】

DAY2 ハヤブタ-22

★ 時刻：夜  
場所：庭

▲主人公は縁側  
栞と紬は庭（縁側前）  
(◇夏の夜の音)  
にいる状態でスタート

細は庭（縁側前）  
(◇夏の夜の音)

▲主人公は縁側を歩いている  
▲主人公立ち止まる

▲ 紬と菜が花火をしている  
※軽く菜と紬が花火をして、騒いでいるアドリブが欲しいです（現場相談）

② 桑「あっ！ おいらんだー！ おーい！」ちー」へ\*遠くに呼び掛け▼

（2）  
絆  
一 お兄さんも  
一 緑い花少しおせんが  
一 へと遠くに咲て挂け  
一

② 紗「そこの縁側にある下駄を使ってください」へ\*遠くに呼び掛け\

▲主人公が下駄を履いて一人に近付く  
(※距離: 近い)

下駄を履いて（※距離・近い）

葉 **①** — おいさん、ごめんね。先に花火してたの」

（2）  
紺  
— (\*小さく笑う) やつはりあの後すぐ花火になつちやいました  
ちなみにお母さんは酔つぱらつたみたいでもう寝ちやつてます

おしさへここから始まると、ついでいい

お兄さん、これでいいですか？」

短  
い  
間

日(2) 級  
—あ  
はし  
どき

## ▲紺が主人公に花火を渡す

「んー、じゃあ私は……これにしようかな」

葉一お姉ちゃん、葉の火つけて!】

田中

▲紬が栞の花火に点火

## 栗 — おおおおおお

B  
2

▲紬が自分の花火に火をつける

B(2) 紬「はい。お兄さんもチャッカマンどうぞ」

▲主人公が自分の花火に火をつける

B(1) 茉「おいさんとお姉ちゃんの地味ー」

B(2) 紬「(\*小さく笑う) 茉のが派手すぎるんだよ」

C(1) 茉「(\*はしゃいでる)」

B(2) 紬「こーつら。走ると危ないよー」

▲間

B(1) 茉「お姉ちゃん、これ消えちゃつたー」

B(2) 紬「じゃあ終わつたやつバケツに入れて。次のやつあげるから」

▲全員バケツに終わつた花火を入れる

B(2) 紬「もう茉が好きそうのは残つてないかなー」

B(1) 茉「えー。花火なくなつちゃつたの?」

B(2) 紬「ううん。まだあるんだけど、あと残つてるのは線香花火だけだね」

B(1) 茉「あー。あの糸みたいなやつだ。ちつちやいから茉好きじゃないかも」

B(2) 紬「綺麗なんだけどなあ、線香花火。ほら、これあげるから茉も一回やつてござらん?」

▲紬が茉に花火を渡す

B(1) 茉「わかった」

B(2) 紬「じゃあつけるよー」

▲紬が茉の線香花火を点火

B(2) 紬「よし、それじゃ私も」

B(2) 紬「はい、お兄さんもどうぞ」

▲主人公も自分の線香花火を点火

▲間

B(2) 紬「小さくぱぱちして可愛いなあ」-\*独り言▽

B(1) 茉「うん! なんか綺麗!」

B(2) 紬「でしょ? 私、線香花火が花火の中で一番好きなんだー」

▲栞の花火消える

B① 栞「ぱーちぱち、ぱーちぱち」

B① 栞「あっ。丸いぴかぴかの落っこちちゃった」

B② 紗「そうやってあんまり揺らしてるとすぐ落ちちゃうんだよ。私もそろそろかな」

▲紗の花火消える

B① 栞「お姉ちゃんのも落っこちたー」

B② 紗「お兄さんは結構続いてますね」

B① 栞「おー。おいさんの、ぴかぴかおつきい」

B② 紗「だね。長い時間落とさないとああなるんだよ。どう？ 面白いでしょ、線香花火」

B① 栞「なんかね、お空の花火ちっちゃくなってるみたいだった」

B② 紗「(\*小さく笑う) 確かに。形は似てるかもしれないね」

B① 栞「あー、おいさんのも落ちたー」

▲終わった花火をバケツに全員入れる

B② 紗「もう一回やりましょうか？」

B① 栞「やるー！ 次はおつきなぴかぴか作る」

B② 紗「はい。お兄さんもどうぞ」

▲紗が主人公と栞に花火を渡す

B② 紗「せっかくなんで、誰が一番長く持つか勝負しませんか？」

B① 栞「栞もできるかなー」

B② 紗「できるできる。ちゃんと揺らさないで持つてれば長く遊べるよ」

B① 栞「わかった！ やってみる！」

B② 紗「お兄さんも準備はいいですか？」

▲短い間

B② 紗「火は私がつけてるので、せーのでいきましょう」

B① 栞「一番なつたらご褒美ある？」

B② 紗「うーん…特に考えてないかなあ。栞は何か思いつく？」

B① 栞「えっと…びりの人が一番の人のいう事きくー！」

B② 紗「(\*小さく笑う) それいいね、面白いかもっ」

B(2) 紬「お兄さんも異議なしですか？」

A(8) 紬「じゃあ付けますよ～」

▲ 紬チャツカマンを点火

A(8) 紬「せーのつ！」

A(8) 紬「せーのつ！」

▲三人とも花火に点火

▲ 間

A(2) 蕉「がんばれーがんばれー」へ\*一生懸命願つてる感じ＼

A(8) 紬「(\*小さく笑う) お姉ちゃんも負けないぞ～」

▲ 間

A(8) 紬「あ」

A(2) 蕉「あ」

A(8) 紬「おいさん、びりだー」

A(8) 紬「(\*小さく笑う) そうだね。一番の人の言つ事聞いてもうおつ？」

▲ 間

A(2) 蕉「あつ、蕉の落ちた」

A(8) 紬「(\*小さく笑う) 私のも落ちちゃった。ほとんど同時だつたね」

A(2) 蕉「うん！ ジゃあ蕉もお姉ちゃんも一番だ！ おいさんがビリー！」

A(8) 紬「(\*小さく笑う) さーつてお兄さんに何をお願いしちゃおつかな～？」

A(2) 蕉「しちゃおつかなー、しつちやおつかなー」

A(8) 紬「うーん、でも私じゃ面白いお願ひできなさうだから、蕉が決めちゃつていいよ」

A(2) 蕉「いいのー？」

A(8) 紬「うん。それでいいですよね？ お兄さん」

A(8) 紬「(\*小さく笑う) お兄さんも蕉のお願い聞いてくれるって」

A(2) 蕉「よーし、うーんとねー」

▲ 間

A(2) 蕉「きまつた！」

A(8) 紬「もう決まったの？ あんまり無理なお願いはしちゃダメだよ？」

A(8) 紬「じゃあ付けますよ～」

A② 茉「うん！ えっとねー、……茉、次の夏休みも、おいらさんと花火したい！」

A⑧ 紗「(\*小さく笑う)」

A② 茉「このお願いダメなの？」

A⑧ 紗「お兄さんも笑つてるし、いいんじゃない？ 私も賛成だよ」

A② 茉「やつたー！ ジャあおいらさん約束だからね、来年も花火するの！」

A② 茉「あ、おいらさんお手てだして！」

▲茉が主人公に指切りをする

A② 茉「ゆーびきーりげんまん嘘ついたら針千本のーます、ゆびきつたー」

A⑧ 紗「(\*小さく笑う) よかつたね茉、これで来年もお兄さんと遊べるよ」

A② 茉「うん！ 来年はもつとおつきな花火みたい！」

A⑧ 紗「(\*小さく笑う) それはどうだろうねー。」

A② 茉「(\*小さく笑う) そら辺じや大きな花火大会なんてないから」

A② 茉「えーおつきいのないのー」

A⑧ 紗「うーん……あー、お兄さんのトコに行けばあるかも」

A② 茉「おいらさんのおうち？ いきたーーーい！ 茉、おいらさんのお家行きたーーーい」

A⑧ 紗「私も行つてみたい！ いいですね、最下位のお兄さん？」

^\*「最下位のー」いたずらっぽく

▲間

A⑧ 紗「(\*小さく笑う) やつた！ お小遣い貯めとかなきやー。」

A② 茉「おいらさんあいがとーーー！」

A⑧ 紗「さつそく後でお母さんに話してみなきやね！」

A② 茉「うんー！」

▲間

A⑧ 紗「よーし、そうと決まれば、ささつと片付けしちゃおーーう」

A② 茉「茉もお片付けするーー！」

B① 紗「あ、お兄さん、その袋とつて貰つていですかー？」

B② 茉「お姉ちゃん、これどこに置けばいいのー」

B① 紗「それは玄関の方に持つてくから、そこに置いといてー」

(◇) 紗「よーし、そうと決まれば」から以下 適宜フロードアウト

【DAY2 チャンター23】

☆時刻：夜 場所：主人公の部屋

主人公が部屋の布団で寝転がっている状態でスクリーン

(夏の夜の音)

◆部屋の扉を栞が外から叩く  
(◇適宜 動作音)

(※距離：部屋の外から)  
(※栄と紬ボイス扉越し)

⑧ 桑 「おじさん、もうおやすみしたー？」

⑧「(\*小さく笑う)ダメダメ。  
「そんなにしたらお兄さんほんとに寝てても起きちゃうでしょ」へ\*あははな感じ✓

○(8) 紬「こういう時はこうやって

▲ 紬が優しく扉をノック

〔三〕 細一お兄さん今度のどいしてですかー? ほら聞いてどうぶん?」

卷四

卷之三

## ▲ 紬と栞が部屋に入る

B⑧ 紗「すいません、もう横になられてたんですね」

（1）菜ーでもまた電気ついてるよ？

卷之三

▲主人公の横に栂がトテトテ駆けてくる  
(※以下栂ボイス 距離: 近くなつてくる)

田  
①  
葉一おしさん  
葉い一し。にれんれしはき力一

「(\*小さく笑う) もしお兄さんのお邪魔じゃなければなんんですけど  
三人で川の字になつて横になりませんか?」

(※以下葉ボイス 距離：すごく近い 方向：左)

ア  
③  
栗  
栗、おいさんの隣とつたー

A③ 茉「もう枕おいたもん。茉、おいらさんと一緒にいいの」

B⑧ 紗「(\*小さく笑う) どうでしょ? お兄さん、明日には帰られてしまうみたいなので最後の夜は三人でいたいなーと思いまして」

### ▲ 間

B⑧ 紗「(\*ぱつと笑う) ありがとうございます!」

A③ 茉「お姉ちゃんはどこでねんねするのー?」

B⑧ 紗「んーそーだなあ。じゃあせつかくだから……」

▲上記台詞「じゃあせつかくだから」部分を言いつつ、紗が主人公の隣へ

A③ 茉「あー、お姉ちゃんもおいらさんの隣がいいんだー」

(※以下紗ボイス 距離:すゞく近い 方向:右)

A⑦ 紗「うん、私もお兄さんの隣がいいかな」

A⑦ 紗「最初はやっぱ緊張したけど、今はお兄さんの隣にいるとなんだか落ち着くんだよね」

A③ 茉「んふふー。おいさん人気者ー。茉、おいさんすきー」

▲茉が主人公の腕に抱きつく

A⑦ 紗「(\*小さく笑う) 私もお兄さん好きー」

▲紗が主人公の腕に抱きつく

A③ 紗「(\*笑う)」

A③ 茉「おいらさんもすきー?」

A⑦ 紗「あー、それ気になるかもー。どうなんですかーお兄さん?」^\*笑いつつ^

A③ 紗「んふふー」

A⑦ 紗「ふふつ」

### ▲ 間

A⑦ 紗「あれー? お兄さん、顔が赤いですよー」

A③ 茉「あー、ほんとー! おいさんお顔真っ赤ー」

▲主人公が立ち上がり 電気を消す  
(◇適宜 動作音)

B⑦ 紗「もー、いきなり電気消さないでくださいよー。顔が見えないようにしましたねー」

B③ 茉「(\*笑う) まっくらだーまっくらだー!」

A⑦ 紗「ねー、急に真っ暗にされちゃったねー」

A③ 蕉「(\*小さく笑う) そうだねー」

A⑦ 紬「(\*小さく笑う) なんもみえない」

▲短い間

A⑦ 紬「(\*ふう、と一息) お兄さん、この一日間楽しかったですか?」

A③ 蕉「蕉楽しかったよ? おいさんいいっぱい遊んでくれたもん」

A⑦ 紬「もう、お兄さんに聞いてるんだけどな~」へ\*笑いつつ

A⑦ 紬「でも、私も蕉と同じでほんとに楽しかった。特別な何かをしたって訳じやないのになあ」

A③ 蕉「えー、いっぱいしたよー?」

A⑦ 紬「そうかなあ、とくにいつもと変わらない気がするけど」

A③ 蕉「蕉、おいさん口ボで神社いったもん。いつもと違うよ? おいさんと行つたの特別だもん」

A⑦ 紬「(\*小さく笑う) そつか、そうだよね。いつもと同じようで、いつもと全然違うのかも」

A③ 蕉「うんっ!」

A⑦ 紬「私はーーー、一緒の部屋で宿題したり、お兄さんに耳かきしてあげたり」

A③ 蕉「みんなで川も行つた!」

A⑦ 紬「川遊び、涼しくて気持ちよかつたねー」

A③ 蕉「あと、駄菓子屋でかき氷作つて、花火した!」

A⑦ 紬「あーあれ。不安だつたわりに美味しかったですよねー、蕉の作ったかき氷」

A③ 蕉「んふー (\*得意げ) おいさん、蕉かき氷作つたから偉いんだよー?」

A⑦ 紬「(\*笑う) まーた始まつた」

A③ 蕉「あ、あとあと、おいさんとお姉ちゃんは一緒にお風呂入つてた!」

A⑦ 紬「(\*あはははー) それは今並べなくともいいかな~」へ\*「ミミカルな苦笑い

A③ 蕉「えー、なんでー?」

A⑦ 紬「なんでも。今思い出すとまだ恥ずかしいし」へ\*照れ

A③ 蕉「なんでー?」

▲間

A⑦ 紬「わかんなくていいのつ。さつ、もうこの話お終いつ。お兄さんも明日は長旅ですよね? そろそろ静かにして、眠りましょうか」

A③ 茉「やだー。茉まだ眠くないもん」

A⑦ 紬「えー。お兄さんはどうです？ そろそろ眠くなりませんか？」

▲短い間

A⑦ 紬「ほらー、お兄さんも眠くなつてきたつて」

A③ 茉「やだー！ 茉だけ寝れないのやだー！」

A③ 紬「ひとりぼっちでお化け出たらやだもん」^\*泣きそう^

A⑦ 紬「んーどうしようかなあ」

A⑦ 紬「あ、じゃあ一緒に羊さん数えようか」

A③ 茉「羊さん？」

A⑦ 紬「そう、羊さん。茉知らない？ 羊を数えると眠くなるって」

A③ 茉「そうなの？ じゃあ茉も羊さん数えるーー。」

A⑦ 紬「お兄さんも眠くなつたら寝ちゃつてくださいね」

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY2 ナヤブタ-24】

☆時刻：夜 場所：主人公の部屋

(◇夏の夜の音)

▲三人並んで寝ている状態でスタート

(※距離：近い)

A(7) 紬 「それじゃあ羊さん数え始めるよー。  
お姉ちゃんが数えた後に羊さんを増やしていけばいいからね」

A(3) 茉 「うん！」

A(7) 紬 「よーし。 (\*「ホヽと咳払い) 羊が1匹」

A(3) 茉 「羊が2匹ー」 ^\* 大きめ

A(7) 紬 「茉、 そんな大きな声出さないの。 田を閉じて静かにゆっくり数えるんだよ？」

A(3) 茉 「わかったー、 お姉ちゃん続けて」

A(7) 紬 「うん、 ジャあ羊が3匹」

A(3) 茉 「羊が4匹」

A(7) 紬 「羊が5匹」

▲そのまま交互に

A(3) 茉 「羊が10匹。 羊さん増えてきたー」

A(7) 紬 「そうだね。 茉が眠くならないとずっと増えちゃうよ？ えっと、 羊が11匹」

A(3) 茉 「羊が12匹」

▲そのまま交互に

A(7) 紬 「羊が31匹」

A(3) 茉 「(\*あぐび) 羊あ32ー」

A(7) 紬 「眠くなってきたかな？」 ^\* 小声独り

A(7) 紬 「羊が33匹」

A(3) 茉 「羊、 34ー」

A(7) 紬 「^\* 小さく笑う^\* 羊が35匹」

A(3) 茉 「羊…36」 ^\* 「36」 部分の3は消えかけ

A(7) 紬 「羊が37匹」

A(3) 茉 「羊、 36」

A(7) 紬「(\*小さく笑う) 羊、増えなくなっちゃった」

▲短い間

A(7) 紬「( \* そろそろねんねする〜?)」^\*小声v

A(3) 芝「羊、さん…(\*むにやむにや)」

A(7) 紬「(\*小さく笑う) おやすみ」^\*優しくv

▲短い間

A(7) 紬「お兄さんは?(\*小さく笑う) やっぱり。まだ起きてますよね」^\*小声v

A(7) 紬「私、このまま数えていてもいいですか?」^\*小声v

A(7) 紬「ありがとうございます」^\*小声v

A(7) 紬「では、羊が38匹」

▲そのまま紬が一人で数える

A(7) 紬「羊が50匹」

A(7) 紬「(\*小さく笑う) 50匹まで来ると、結構大きな牧場ですね〜」^\*小声v

A(7) 紬「トリミングするのが大変そうです」^\*小声v

▲短く間

A(7) 紬「えっと、羊が51匹」

▲そのまま紬が一人で数える

A(7) 紬「羊が70匹」

A(7) 紬「お兄さん、まだ起きてますか?」^\*小声v

A(7) 紬「(\*小さく笑う) 私もだいぶ眠くなつてきました」^\*小声v

A(7) 紬「( )まで数えたのは初めてですけど、結構効果あるんですね」^\*小声v

A(7) 紬「でもまだまだ増えますよ〜。羊が71匹」

▲そのまま紬が一人で数える

A(7) 紬「羊が90匹」

A(7) 紬「(\*あくび) 羊が91匹」

A(7) 紬「(\*小さく笑う) 私もそろそろかなあ」^\*小声v

A(7) 紬「ふう、あとちょっと」

A(7) 紬「羊が92匹」

▲そのまま紬が一人で数える

A⑦ 紬「羊が100匹」

A⑦ 紬「ふう。ついに大台に乗りました」

A⑦ 紬「きりもいいし (\*伸び) ここでお終いにしようかな」

▲間

A⑦ 紬「^\*小さく笑う^\*お兄さんも、もう寝ちゃったかな?」

A③ 栗「んー、お兄さん……」^\*寝言^>

▲上記台詞で栗が主人公に抱き着く

▲紬が上半身だけ起き上がり、主人公の様子を見る

A⑧ 紬「(\*小さく笑う) 栗ったら、お兄さんに抱きついちゃってる」

▲紬がまた横になる

▲間

A⑦ 紬「私もこっち側に抱き着いちゃおっと」

A⑦ 紬「(\*小さく笑う) 今日はいい夢見れそうかも」

▲間

A⑦ 紬「おやすみなさい、お兄さん」

♪S

栗と紬の寝息  
(◇秒数適宜)

♪E

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

## 【DAY3 チャプター-25】

☆時刻：朝 場所：玄関前

(◇環境音・夏の朝)

▲主人公が玄関を開ける

B⑤ 母「忘れ物してないかちゃんと確認しろよ～」

B④ 紗「私、バス停まで見送りに行つてくるね」

B⑥ 茉「茉もいく！」

B① 母「んじやあまあ、またいつでも遊びに来い。うちの旦那も会いたがつてたからさ」

B① 母「あ、あとお前、来年は」いつらと花火見るとか約束したんだろう？」

A③ 茉「おじやん、指切りしたもん！ 茉と花火見に行くんだよ～」

A⑦ 紗「うん！ お兄さんのお家、遊びに行くんだから」

B① 母「あははははは。ちゃんと子供との約束は守つてやれよ～。

なにせ母親の言葉真に受けて、風呂場に突撃するほど純粋なガキだからな」

A⑦ 紗「いつ、今それは関係ないでしょ！ それにお兄さんはそういう適当なタイプの人じやないんだから…」

A③ 茉「そうだよ～。おじやん、約束守るもん～」

B① 母「おーおー。お前、やたらこいつらに懐かれてるじやないか～」

B① 母「なんか特別な事でもしたのか？」

A⑦ 紗「ううん、なんにも。でも特別だよねっ茉？」

A③ 茉「うん！ なんにもだけ特別だよ～！」

B① 母「カツツーーー。よくわっかんねえなあ。あー、まあいや。そろそろ時間だろ？」

B① 母「気を付けて帰れよ！ んじや茉、紗見送りよろしく～」

A⑦ 紗「行きましょうか、お兄さん」

▲主人公が荷物を持ち玄関の外へ

▲主人公と紗と茉が歩き出す

C① お母さん「また来いよな～！ あと、身体には気をつけろよ～」

(◇適宣アウト)

【DAY3 チャプター26】

☆時刻：朝 場所：バス停

(△環境音 夏の朝)

【A(7)】 細  
—そろそろバスが来る時間ですね】

ア  
③

緑一（\*小説家第三） 沢田也暉（わい）

卷之三

（アーリー・エイジ）「…………。」

卷之三

卷之三

卷之二

▲栢が主人公の頬にキス（※子供のかわいいやつです）

ア  
ン  
タ  
な  
に  
し  
て  
、  
！  
ア  
ン  
タ  
な  
に  
し  
て  
、  
！  
？

好 （3）きな人にする「でお母さん」と「お父さん」へ\*「機嫌」

緋アマ一ハナシたタマてタマ!

紅葉の葉の匂いを嗅ぎ、暖かく照れて、

卷之三

A ⑦ 紬「忘れ物ないですか？」

③ 茄「おいさん、 茄お手紙かくね」

紺 「あ？ 私も！」 ちゃんとお返事書いてくださいよー」

## ▲バスの扉が開く

卷之二

「緑の馬の等」

A ⑦ 紗「わ、私のファーストキスまでござたんですかー」 ×\* 小声 ✓

紬 「ちゃんと来年の約束守つてくださいね！」

▲紬がバスを見送る形に戻る

⑥ 細「さ、さあ、早く乗ってください！」  
バスが出ちやいますよ】ヘ\*照れつづく

▲主人公バスに乗り込み、窓を開ける

B ③ 茄「お姉ちゃんお顔真っ赤ー」

B ③ 紬 「うるさいー！」

▲バスの発車が鳴り、バスが発車

（四）  
絶一枝兄弟  
元氣一いづかにいれ

卷三

(△適宜 アウト)